

## 16. 建物群15

南地区北東部、建物群12の南側、建物群14の東側に位置する(第79図)。9棟の建物(SB99～SB107)からなる(第206図)。南部に位置するSB107を除いては、平面的な重複が顕著である。



第206図 建物群15

## SB99(写真図版39 附表19)

検出状況 建物群15の北西隅に位置する(第206図)。SB100の北側に位置し(第210図)、棟軸方向をほぼ同じくしている。P5がSB103のP2を切っている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている(第207図)。

建物 北西 - 南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の総柱建物である(第208図)。桁行・梁行がほぼ平行関係にあり、平面形は正方形をなしている。建物の規模は、北西梁行(P1 - P3)で3.45m、北東



第207図 SB99の調査

桁行(P3-P5)で3.40mを測り、両者を基準とした建物の面積は11.73m<sup>2</sup>である。北東桁行を基準とした棟軸方向はN22°45'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表19の通りである。

**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。柱穴の平面形はP5・P6・P8・P9に方形傾向が認められる。他の柱穴は不整形傾向にある。検出面からの深さは5cm~22cmと全体的に浅い傾向にあるが、P1が32cmと突出した深さである。柱穴の規模は、P5が極端に大きく、他はほぼ同規模である。

埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂1層からなる。柱痕を確認することができた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表19の通りである。

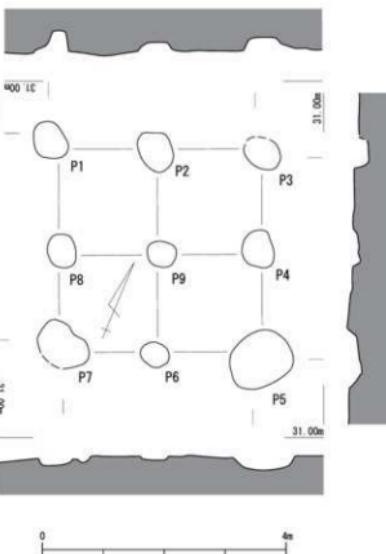
**出土遺物** P8から須恵器の長頸壺の頸部片が出土している。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

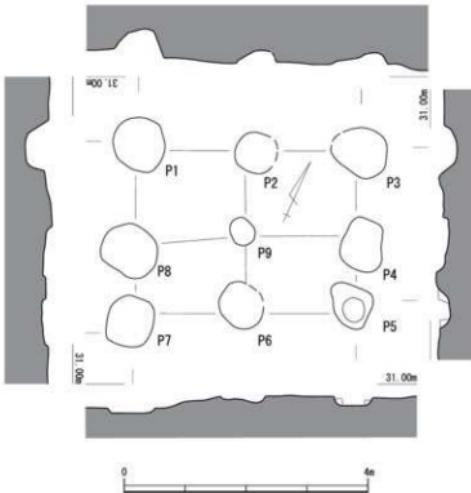
#### SB100(附表19)

検出状況 建物群15内北西部に位置する(第206図)。SB102と平面的に重複し(第210図)、本建物のP6とP7がSB102のP6とP7に切られている。SB103とも平面的大半が重複しているが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

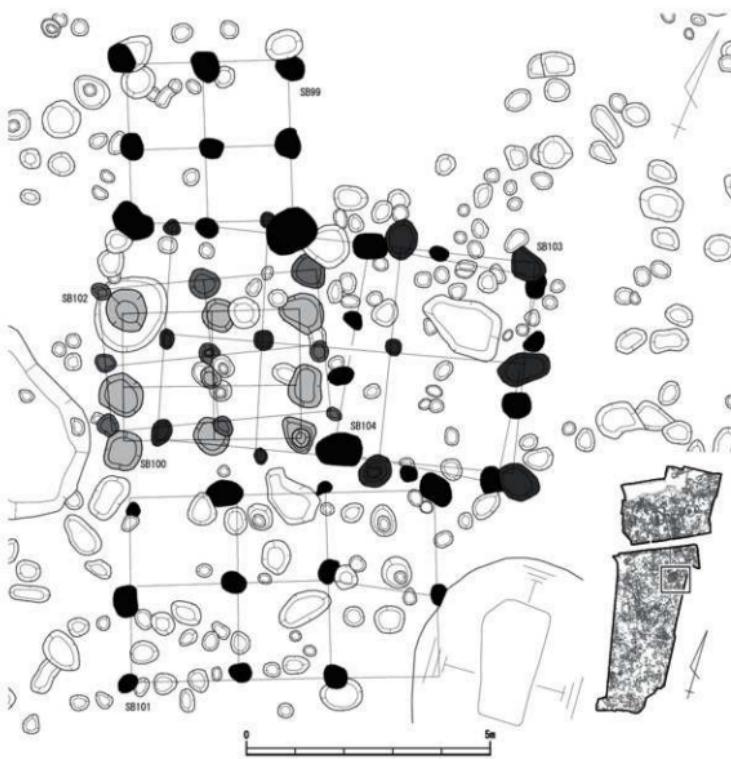
**建 物** 東西方向に棟軸をもつ



第208図 SB99



第209図 SB100



第210図 建物群15(SB99～SB103)

梁行2間、桁行2間の総柱建物である(第209図)。梁行は平行関係にあり、北桁行とも直角関係にある。しかし南桁行に関しては直角関係ではなく、全体的にやや歪んだ平面形をなしている。北桁行(P1-P3)で3.70m、西梁行(P1-P7)で2.90mを測り、両者を基準とした建物の面積は10.73m<sup>2</sup>である。西梁行を基準とした棟軸方向はN23°45'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表19の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の規模は、P9が極端に小規模である以外、他の柱穴はほぼ同規模である。柱穴の平面形は、P1・P2・P4・P6～P8については方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴はP5に限られる。各柱穴の規模は附表19の通りである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 出土遺物から時期を特定することは困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB101(附表19)

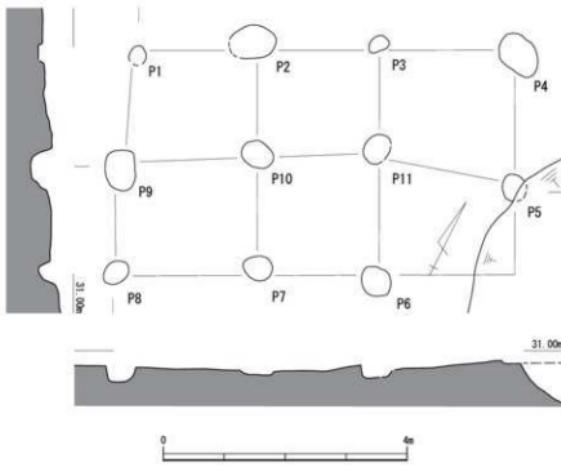
**検出状況** 建物群15南西部に位置する(第206図)。SB100・SB102・SB103の南側に位置し(第210図)、特にSB100とは棟軸方向を同じくしている。ただしこれらの建物との前後関係は、調査では明らかにできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北東－南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の総柱建物である(第211図)。桁行はほぼ平行関係にあるが、西梁行に関してはやや柱通りが乱れている。建物の規模は、北西桁行(P1-P4)で6.20m、南西梁行(P1-P8)で3.60mを測り、両者を基準とした建物の面積は22.32m<sup>2</sup>である。南東側行を基準とした棟軸方向はN64°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表19の通りである。

**柱 穴** 東隅の1穴を欠く。柱穴の平面形は、P4・P6・P9に方形傾向が認められるが、他の柱穴は梢円形傾向にある。検出面からの深さは、P1・P5・P10のように10cm以下と浅いものも認められる。柱穴の規模は、P2・P4・P9が他より大きく、他はほぼ同規模である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂1層からなる。柱痕を確認することができた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表19の通りである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 出土遺物から時期を特定することは困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

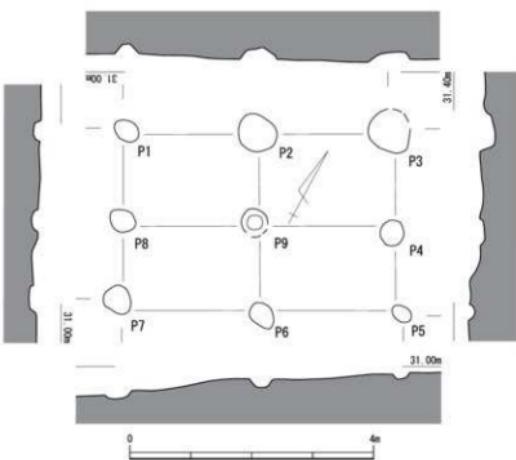


第211図 SB101

## SB102(写真図版40 附表19)

**検出状況** 建物群15内北西部に位置する(第206図)。SB100と平面的にはほぼ一致する(第210図)。本建物のP6とP7がSB100のP6とP7を切っている。建物全体が検出されている。

**建 物** 北東－南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の総柱建物である(第212図)。梁行、桁行



第212図 SB102

とも柱通りが比較的良好で、整った平面形をなしている。桁行に関しては、南東桁行(P5-P7)で4.65m、北西桁行(P1-P3)で4.35mとほぼ同規模である。北西桁行と南西梁行(P1-P7)2.75mを基準とした面積は11.96m<sup>2</sup>である。南東桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向はN62°15' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表19の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の規模は、P2とP3が50cmを超え、他より大規模な傾向にある。他の柱穴は50cm未満でほぼ同規模である。柱穴の平面形は不定形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴はP9に限られる。各柱穴の規模は附表19の通りである。

**出土遺物** P2から土師器の甕Eの口縁部片が出土している。ただし小片のため図化できなかった。

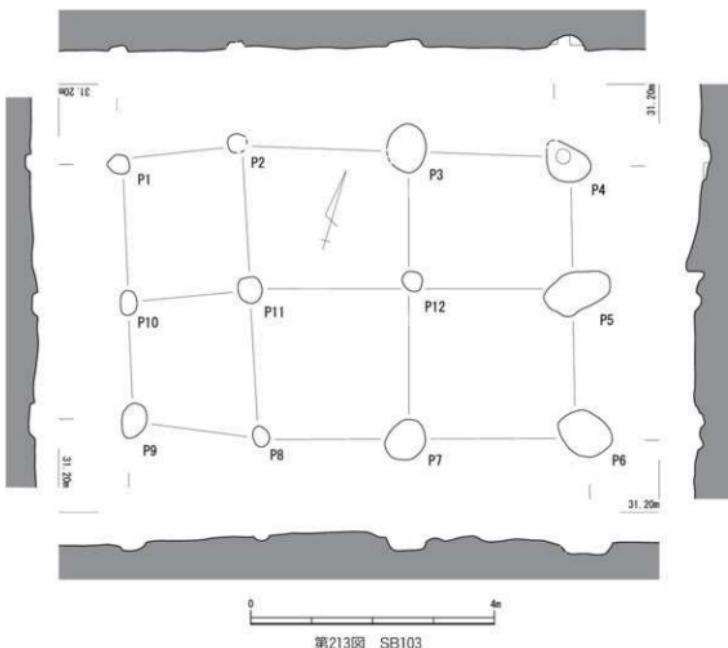
**時 期** 出土遺物からの時期の特定は困難である。棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB103(附表20)

**検出状況** 建物群15北部に位置する(第206図)。SB100・SB102・SB104と平面的に重複し(第210図)、P2がSB99のP5に切られている。またP4がSB104のP1を切り、P6がSB104のP4をそれぞれ切っている。さらにSB105とも平面的に一部重複するが、前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間からなる総柱建物である(第213図)。桁行・梁行ともには平行関係にあり、平面形はほぼ長方形をなしている。建物の規模は、北西桁行(P1-P4)で7.00m、東梁行(P4-P6)で4.45mを測り、両者を基準とした建物の面積は31.15m<sup>2</sup>である。東梁行の直交方向を基準とした棟軸方向はN17°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表20の通りである。

**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。柱穴の平面形はP3・P6・P7に方形傾向が認められる。



第213図 SB103

他の柱穴は不整形傾向にある。検出面からの深さは8cm~23cmと、全体的に浅い傾向にある。その規模は、P3~P7が60cm~70cm大と全体的に大きく、他は30cm~40cm大と小規模で円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂1層からなる。このなかで、P4において柱痕を確認することができた。各柱穴の規模は附表20の通りである。

**出土遺物 遺物は全く出土していない。**

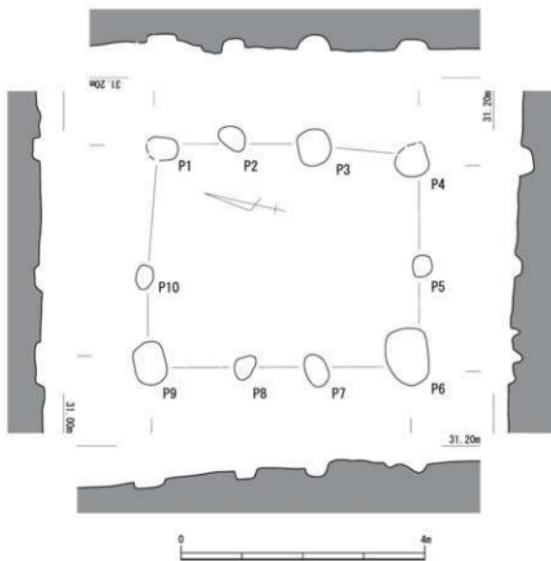
**時 期 出土遺物からの時期の特定は困難である。棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。**

#### SB104(写真図版40 附表20)

**検出状況 建物群15内中央部西側、SB100・SB102の東側、SB106の西側に位置する(第206図)。SB103と平面的に重複し、P3とP6がSB103のP4とP6に切られている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている**

**建 物 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第214図)。桁行・梁行がほぼ平行関係にあり、平面形はほぼ長方形をなしている。**

建物の規模は、西桁行(P6~P9)で4.25m、北梁行(P1~P9)で3.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は14.87m<sup>2</sup>である。西桁行(P6~P9)を基準とした棟軸方向はN12°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表20の通りである。



第214図 SB104

**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。柱穴の平面形はP3・P6・P9に方形傾向が認められる。他の柱穴は不整形傾向にある。検出面からの深さは10cm～20cmを測り、最深(P4)で28cmと、全体的に浅い傾向にある。その規模は34cm～50cm大が多く、P6の70×92cmの規模が突出している。全体的に中间柱は小規模な傾向が認められる。全ての柱穴において柱痕は確認されていない。埋土はいずれも黒褐色極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表20の通りである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時 期** 出土遺物からの時期の特定は困難である。棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB105(附表20)

**検出状況** 建物群15内中央部、SB102の東側、SB106の西側に位置する(第206図)。SB104と約1/2、SB106と一部が平面的に重複しているが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北西～南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の個柱建物である(第215図)。両梁行は平行関係にあるが、南西桁行の柱通りは良好ではなく、平面的にはやや歪んだ形状を呈している。

建物の規模は、北西梁行(P1～P3)で4.65m、北東梁行(P3～P5)で5.15mを測り、両者を基準とした建物の面積は23.94m<sup>2</sup>である。北東桁行を基準とした棟軸方向はN38°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表20の通りである。

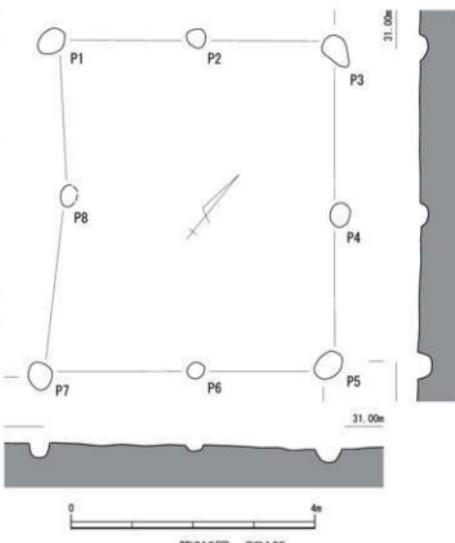
**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。いずれの柱穴の平面形も梢円形傾向にある。その規模は、50

cmを超えるものではなく、全体的に小規模である。深さもP7の24cmが最深で、他は6cm~13cmと浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂~細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表20の通りである。出土遺物 遺物は全く出土していない。

**時期** 出土遺物からの時期の特定は困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB106(図版12 附表20・37)

**検出状況** 建物群15東部。SB105の東側に位置する(第206図)。SB105と一部が平面的に重複しているが、調



第215図 SB106

査では前後関係を明らかにすることはできなかった。またP5の一部が後世の搅乱を受けている。他の造構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建物** 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第216図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。北梁行(P1~P3)で4.25m、と西桁行(P1~P7)で5.55mを測り、两者を基準とした建物の面積は23.58m<sup>2</sup>である。西桁行を基準とした棟軸方向はN 20° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表20の通りである。

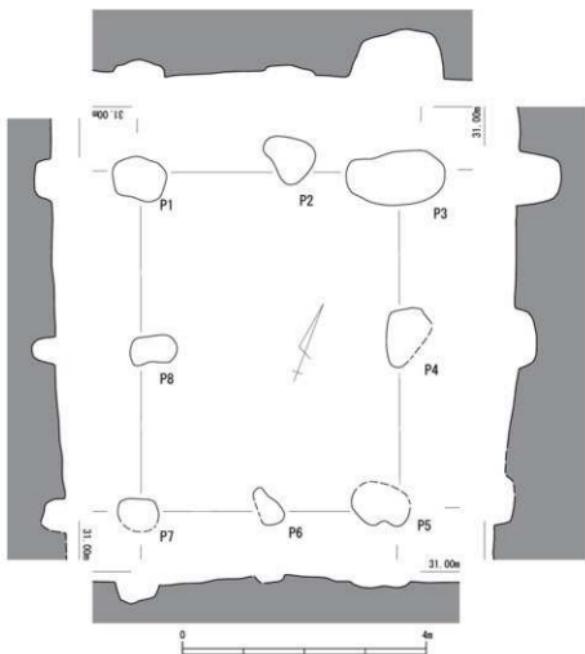
**柱穴** 全ての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も平面形が歪んだ形状をなしている。またP3については、大型でその平面形から土壤と捉えることも可能であるが、他の柱穴との並びから建物の一部と判断している。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂~細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表20の通りである。

**出土遺物** P4とP5から土器が出土している。

**P4出土土器** 須恵器の碗(310)の口縁部片が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

**P5出土土器** 土師器の杯の体部片が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

**時期** 棟軸方向および出土遺物から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

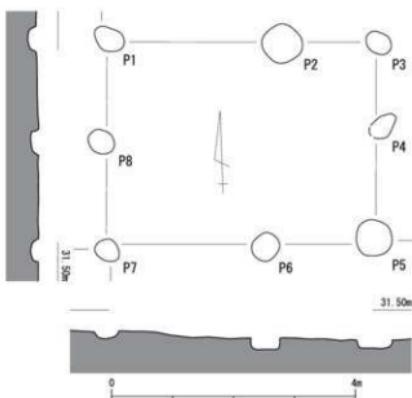


第216図 SB106

## SB107(附表20)

**検出状況** 建物群15南部に位置する(第206図)。建物群15のなかで、唯一他の建物との平面的重複、切り合い関係が認められない建物である。SB101の南東側に位置するが、やや離れている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の楕柱建物である(第217図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、平面形は全体的に整った長方形をなしている。ただし、南北両桁行の中間柱が中間より東側に寄った位置にある。建物の規模は、西梁行(P1-P7)で3.50m、南桁行(P5-P7)で4.40mを測り、両者を基準とした建



第217図 SB107

物の面積は15.40m<sup>2</sup>である。東桁行を基準とした棟軸方向はN 2° 30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表20の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。ただしP4の一部が他の柱穴に切られている。平面形は、隅丸方形傾向にあるものが多く認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質板細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表20の通りである。

**出土遺物** P4から土師器の輪が出土している。口縁部から体部にかけて残存するが、小片のため同化はできなかった。外外面とも回転ナデにより仕上げられている。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅲ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

## 17. 建物群16

南地区中央部、建物群13の南東側、建物群17の西側にあたる(第79図)。12棟の建物(SB108～SB119)からなる建物群である(第218図)。建物相互の平面的重複・切り合い関係が顕著である。



第218図 建物群16

## SB108(図版12 附表21・37)

**検出状況** 建物群16南西部に位置する(第218図)。SB115の南西側にあたり、他の建物とは重複せず単独で検出されている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北東-南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第219図)。南西梁行の柱通りがやや乱れている。建物の規模は、北西桁行(P1-P3)で4.30m、北東梁行(P3-P5)で3.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は15.05m<sup>2</sup>を測る。北西桁行を基準とした棟軸方向はN49°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表21の通りである。

**柱 穴** P6については2基の土壌に切られ、わずかに残存するにとどまる。P6を除く柱穴については、調査時において土壌と判断していたものである。さらにP3については、他の遺構と切り合っている可能性も考えられるが、調査では明らかにすることはできなかった。平面形は隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂-細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表21の通りである。なおP3とP4については、底部の深さを記録することができなかった。

**出土遺物** P1・P2・P5から土器が出土している(図版12)。

**P1出土土器** 土師器の杯皿類と甕が出土している。杯皿類もしくは皿と考えられる底部の小片で、内外面とも赤彩が認められる。甕は体部片が出土しており、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

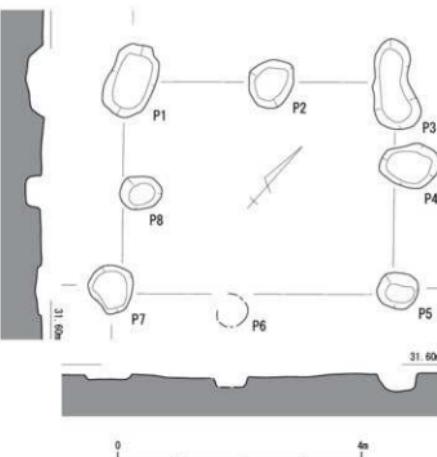
**P2出土土器** 土師器と須恵器が出土している。

土師器は甕と鍋が出土している。甕は体部片が出土しており、内面はヘラ削りにより仕上げられている。外面はハケによるものとヘラナデによるものが認められる。鍋は口縁部片と頭部片が出土している。頭部片は、内面がヘラ削りにより、外面は縱方向のハケによりそれぞれ仕上げられている。外面には煤の、内面には焦げの付着が認められる。

須恵器は、杯Aと杯B(311)が出土している。杯Aは底部の小片で、ヘラにより切り離されている。杯Bの311は底部を中心に残存し、回転ヘラ切りにより切り離し後、高台が貼り付けられている。

**P5出土土器** 土師器の碗(312)と杯が出土している。312は碗Bb2に分類され、底部を中心に残存する。底部は回転糸切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯は口縁部から体部にかけて残存し、内外面に赤彩が認められる。

**時期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅲ期に位置付けられる。



第219図 SB108

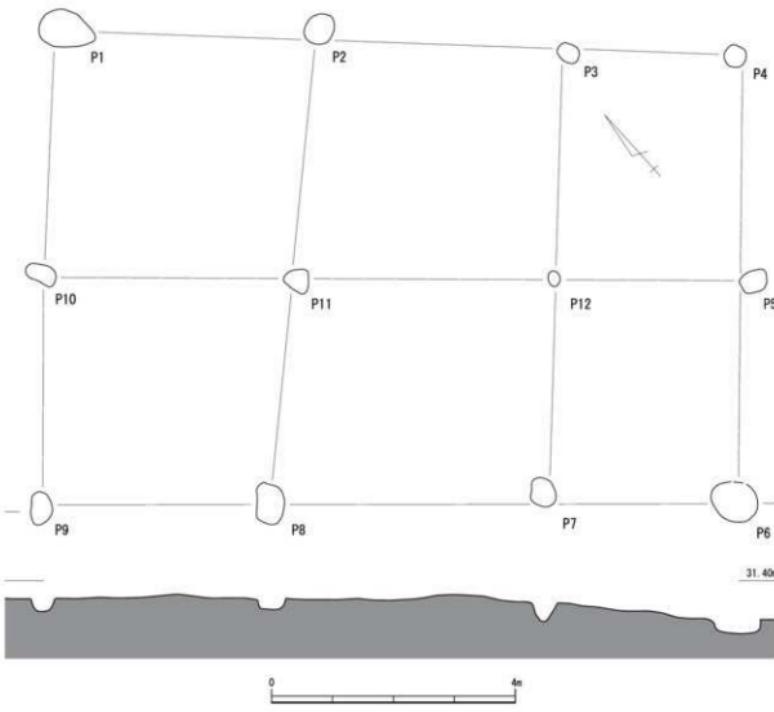
## SB109(附表21)

**検出状況** 建物群16北西部に位置する(第218図)。SB112の北側、SB110の西側に位置し、それぞれ一部が平面的に重複している。ただし調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の造構との切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北西－南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の総柱建物である(第220図)。北東桁行と南東梁行の柱通りにやや乱れが認められ、全体的にやや歪んだ平面形をなしている。このなかで、南西桁行と中央桁行(P10-P5)はほぼ平行している。

建物の規模は、南西桁行(P6-P9)で11.40m、南東梁行(P4-P6)で7.30mを測り、両者を基準とした建物の面積は83.22m<sup>2</sup>と大型の建物である。南西桁行の直交方向を基準とした棟軸方向はN 48° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表21の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、P2・P4のように円形傾向にあるものを除いては、全体的に不整形なものが目立つ傾向にある。柱穴の規模についても、P1・P6・P8のように比較的大型のものから、P12のように極めて小型のものまで、その差が顕著である。特に、中央桁行の柱穴規模が全体的に小型の傾向が認められる。柱穴の深さについても全体的に浅く、最深でP7の



第220図 SB109

32cmである。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表21の通りである。

**出土遺物 P1～P3・P6・P10から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。**

**P1出土土器** 土師器の杯が出土している。体部から口縁部にかけて残存する小片で、全体的に薄手に仕上げられている。

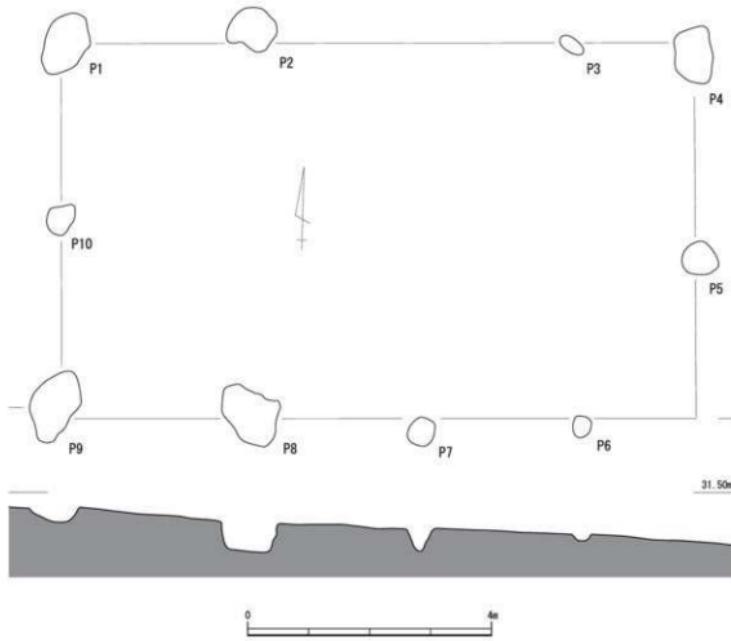
**P2出土土器** 土師器の杯の体部片が出土している。P1出土の杯とは対照的に厚手に仕上げられ、内面には赤彩が認められる。

**P3出土土器** 土師器の杯の体部片が出土している。P1出土の杯同様、薄手に仕上げられている。

**P6出土土器** 土師器の杯と甕が出土している。杯は底部の小片で、内外面に赤彩が認められる。甕は体部片が出土しており、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**P10出土土器** 土師器の甕の体部片が出土している。比較的大型の甕で、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅲ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第221図 SB110

## SB110(図版12 附表21・37)

**検出状況** 建物群16北東部、SB109の北東側に位置する(第218図)。SB109・SB111と一部が平面的に重複しているが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** ほぼ東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行4間の隅柱建物である(第221図)。ただし、北側桁行のP2-P3間および南東隅の1穴を欠く。柱通りは比較的良好で、全体的に整った平面形をなしている。建物の規模は、北桁行(P1-P4)で10.40m、西梁行(P1-P9)で6.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は63.44m<sup>2</sup>である。北桁行を基準とした棟軸方向はN89° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表21の通りである。

**柱 穴** 柱穴の平面形は不整形なものが目立つ。またP1・P8・P9はその規模が1mを超え、大型の柱穴が目立つ傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表21の通りである。

**出土遺物** P2・P3・P6・P10を除く各柱穴から土器が出土している(図版12)。

P1出土土器 須恵器の杯の口縁部片が出土している。

P4出土土器 土師器の壺の体部片が出土し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

P5出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。

P7出土土器 土師器の壺の体部片が出土し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

P8出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はナデにより仕上げられている。

須恵器は皿A(313)が出土している。313は皿Acに分類され、底部から口縁部にかけて残存する。口縁部は短く外反傾向にある。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

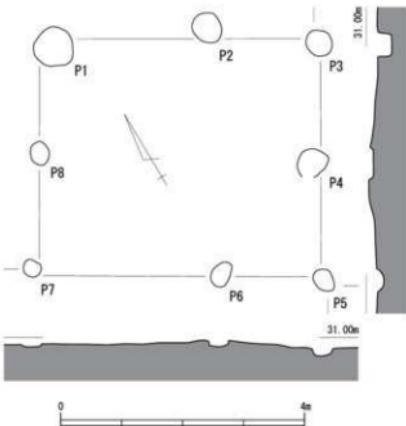
P9出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。内外面ともナデにより仕上げられている。

**時 期** 出土土器および棟軸方向から判断して、南構Ⅷ-2期に位置付けられる  
(第7章第1節)。

## SB111(附表21)

**検出状況** 建物群16北東部、SB109の東側に位置する(第218図)。SB110と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の隅柱建物である(第222図)。北東桁行と北西梁行の柱通りにやや乱れが認められ、全体的にやや歪んだ平面形



第222図 SB111

をなしている。また両桁行とも中間柱が北東側へ寄った位置にある。建物の規模は、南西桁行(P5-P7)で4.70m、南東梁行(P3-P5)で3.85mを測り、両者を基準とした建物の面積は18.09m<sup>2</sup>である。南西桁行を基準とした棟軸方向はN58°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表21の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、P1～P4のように円形傾向にあるものと、P5～P8のように不整形なものが認められる。柱穴の深さについては全体的に浅く、最深でP3の22cmである。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表21の通りである。

**出土遺物** 土器は全く出土していない。

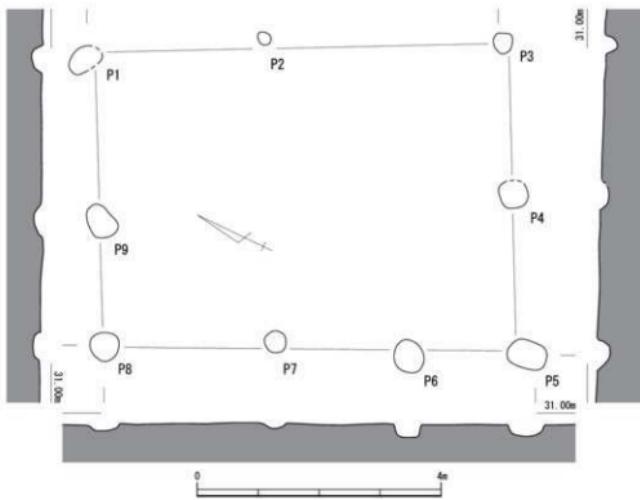
**時 期** 土器が出土していないため、出土土器からの時期の判断は困難である。棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-Ⅷ期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB112(附表21)

**検出状況** 建物群16中央部に位置する(第218図)。SB114の北側、SB109の南側にあたる。SB109・SB113と一部が平面的に重複しているが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第223図)。ただし、北東桁行においては1穴を欠く。柱通りは比較的良好であるが、両側の桁行は平行しない。このため、平面形はやや台形傾向にある。建物の規模は、南西桁行(P5-P8)で6.85m、南東梁行(P3-P5)で5.05mを測り、両者を基準とした建物の面積は34.59m<sup>2</sup>である。南西桁行を基準とした棟軸方向はN25°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表21の通りである。

**柱 穴** 柱穴の平面形は、円形傾向にあるもの(P2)、隅丸方形傾向にあるもの(P3～P8)、楕円形



第223図 SB112

傾向にあるもの(P1・P9)が認められる。P2・P3・P7を除いてはほぼ同規模で、深さについても全体的に浅い傾向が認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表21の通りである。

**出土遺物** P4・P6・P7から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P4出土土器** 土師器の甕の体部片が出土している。外側はハケにより仕上げられている。

**P6出土土器** 土師器の杯と甕が出土している。杯は口縁部が残存する小片で、薄手に仕上げられている。外側面に赤彩が認められる。甕は口縁部の小片で、外側には煤が多量に付着している。

**P7出土土器** 土師器の杯Aが出土している。底部の小片で底部は回転糸切りにより切り離されている。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

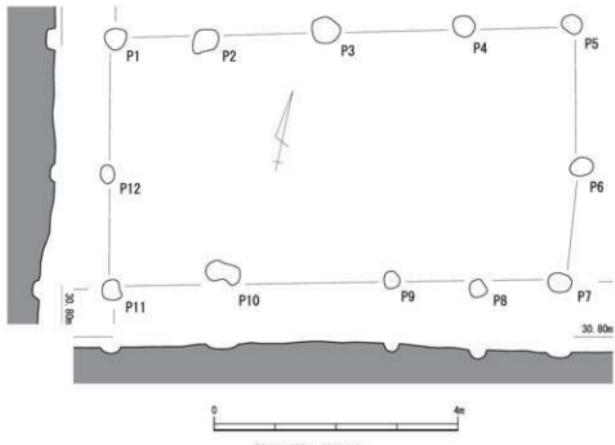
### SB113(附表22)

**検出状況** 建物群16中央部東側、SB112の東側、SB109の南東側に位置する(第218図)。SB112・SB116と一部平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行4間の楕柱建物である(第224図)。桁行・梁行とも平行関係ではない。また南桁行については柱通りも乱れている。桁行の柱穴間距離に関しても南北両側で異なる傾向が認められる。

建物の規模は、南桁行(P7-P11)で7.30m、西梁行(P1-P11)で4.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は29.93m<sup>2</sup>である。南桁行を基準とした棟軸方向はN96°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表22の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は全体的に円形傾向にあるが、P2・P10のように不整形なものも認められる。柱穴の深さについては10cm前後のものが多く、全体的に浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められ



第224図 SB113

ない。各柱穴の規模は附表22の通りである。

**出土遺物** P3から土師器の杯と壺が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。杯は口縁部が残存し、厚手に仕上げられている。壺は体部の小片で、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**時 期** 出土土器および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB114(写真図版41 附表22)

**検出状況** 建物群16中央部南西側に位置する(第218図)。P9がSB115のP4を切っている。SB112の南側、SB117の西側に位置し、両建物と棟軸方向をほぼ同じくしている。他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 南西-北東方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行4間からなる割柱建物である(第225図)。桁行方向はほぼ同規模であるのに対して、梁行方向については東梁行が短くなっている。このため平面形は台形傾向をなす。また南東桁行の柱穴間距離は一定していない。一方他の柱間距離についてはほぼ一定している。建物の規模は、北東梁行(P5-P7)で3.30m、南東桁行(P7-P11)で4.95mを測り、両者を基準とした建物の面積は16.33m<sup>2</sup>である。南東桁行を基準とした棟軸方向はN61°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表22の通りである。

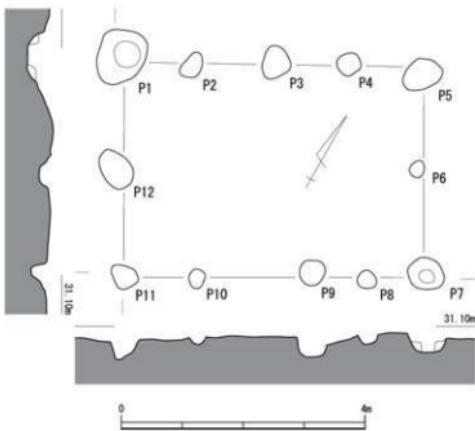
**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も平面形が不整形で、その規模も一定していない。P1・P5・P7の隅柱の規模に大型の傾向が認められる。検出面からの深さについても、10cm未満のもの(P3・P6)と30cmを超えるもの(P7・P9・P11)と、その差が著しい。またP1とP7においては柱痕が検出されている。埋土はいずれも黒褐色極細緻～細緻1層からなる。各柱穴の規模は附表22の通りである。

**出土遺物** P5とP7から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P5出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**P7出土土器** 土師器の杯と壺が出土している。杯は底部を中心には残存し、内外面に赤彩が認められる。壺は体部の小片で、内面はナデ、外面はハケにより仕上げられている。

**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第225図 SB114

## SB115(図版12 写真図版41 附表22・38)

**検出状況** 建物群16内中央部南西側に位置する(第218図)。SB118の西側に位置し、SB118と棟軸方向をほぼ同じくし並列している。P4がSB114のP9に切られている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建物** 南北方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第226図)。桁行・梁行ともにはほぼ同規模で、比較的整った平面形をなしている。ただし桁行・梁行ともに柱通りは整っていない。また両桁行の柱穴間距離は一定していない。

建物の規模は、南梁行(P6-P8)で2.80m、西桁行(P8-P1)で4.30mを測り、両者を基準とした建物の面積は12.04m<sup>2</sup>である。東桁行(P3-P6)を基準とした棟軸方向はN16°15'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表22の通りである。

**柱穴** すべての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も平面形が不整形で、その規模も一定していない。検出面からの深さについても、P6の51cmが際立ち、他は30cm未満である。またP6においては柱痕が検出されている。埋土はいずれも黒褐色極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表22の通りである。

**出土遺物** P1・P3・P5・P6・P8から土器が出土している(図版12)。

**P1出土土器** 須恵器の高杯(315)と壺が出土している。315は高杯の脚端部で、脚部Ddに分類される。端部が下方に折り返され、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。壺は体部の小片が出土している。

**P3出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はナデ、外表面はハケにより仕上げられている。

**P5出土土器** 土師器の杯・鉢・壺が出土している。杯は口縁部の小片で、薄手に仕上げられている。内外面に赤彩が認められる。鉢は口縁部片が出土している。壺は体部の小片で、内面はヘラ削り、外表面はハケにより仕上げられている。

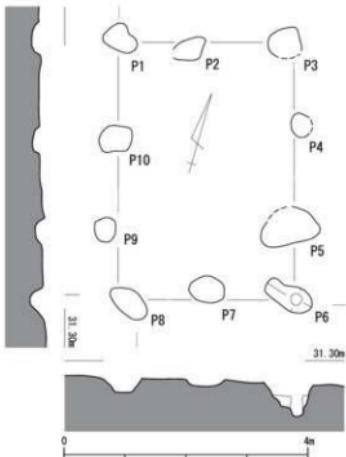
**P6出土土器** 土師器と須恵器が出土している。

土師器は高杯(314)と壺が出土している。314は高杯Ccに分類され、口縁部のみ残存する。内外面とも横ナデにより仕上げられている。胎土は精良で、鉢の可能性も考えられる。壺は、壺Gdに分類される口縁部片と、体部片が出土している。体部片は丸胴タイプに分類されるもので、内面はヘラ削り、外表面はハケにより仕上げられている。

須恵器は杯の口縁部片が出土している。

**P8出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土しており、内面はヘラ削り、外表面はハケにより仕上げられている。須恵器は壺の体部片が出土している。

**時期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構VI-1期に位置付けられる(第7章第1節)。



第226図 SB115

## SB116(図版12 附表22・37)

**検出状況** 建物群16内中央部東側に位置する(第218図)。SB112の南東側・SB119の北側にあたり、SB113・SB117両建物と平面的に重複している。ただし両建物との前後関係については、調査では明らかにできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の隅柱建物である(第227図)。桁行・梁行ともに同規模で、整った平面形をなしている。ただし柱通りに関してはわずかに乱れが認められる。建物の規模は、北桁行(P1-P4)・南桁行(P6-P9)ともに7.00m、西梁行(P9-P1)で4.50mを測り、西梁行と両桁行を基準とした建物の面積は31.50m<sup>2</sup>である。南桁行を基準とした棟軸方向はN83°45' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表22の通りである。

**柱 穴** すべての柱穴が検出されているが、いずれの柱穴の平面形も整った形状をなさない。深さも20cm以下と全体的に浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表22の通りである。

**出土遺物** P1・P3～P5から土器が出土している(図版12)。

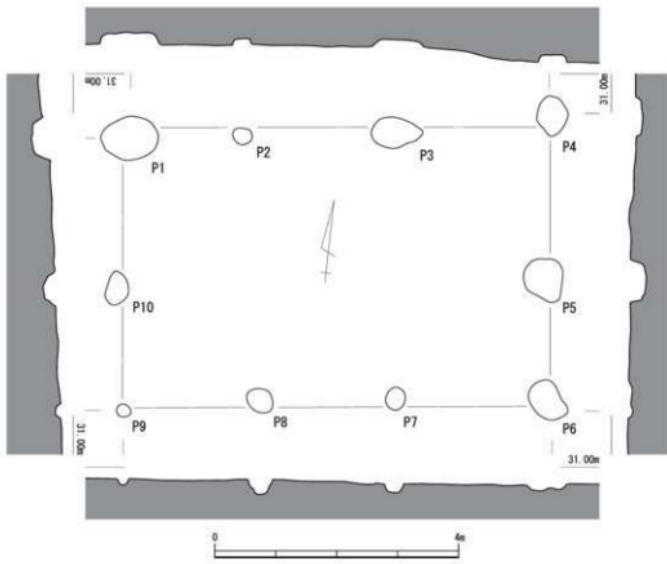
P1出土土器 土師器の高杯が出土している。脚柱部のみの残存で、赤色化している。

P3出土土器 土師器の杯(317)が出土している。317は口縁部のみ残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。椀の可能性も考えられる。

P4出土土器 土師器の高杯が出土している。脚端部のみの残存で、内外面に赤彩が認められる。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土器は杯(316)・杯A・甕が出土している。316は底部を欠くが、杯A2に分類される。厚手に仕上



第227図 SB116

げられ、体部外面は静止ヘラ削り、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。内外面に赤彩が認められる。杯Aは底部片が2点出土しており、いずれも回転糸切りにより切り離されている。

甕は、甕Ea・甕Ecに分類される口縁部片と、体部片が出土している。甕Ecは大型の製品で、長胴タイブに分類されるものである。体部片は、内面がナデ、外表面がハケにより仕上げられている。

須恵器は杯もしくは杯蓋の体部片が出土している。

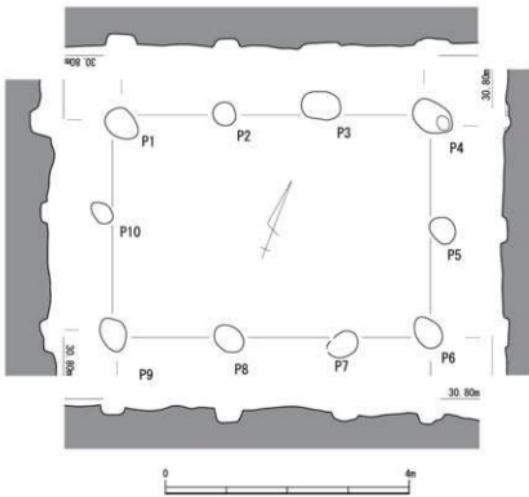
時期 出土土器および棟軸方向から判断して、南構Ⅲ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB117(写真図版41 附表23)

検出状況 建物群16中央部東側に位置する(第218図)。SB114の東側、SB119の北側に位置し、棟軸方向をほぼ同じくしている。SB116・SB118と一部平面的に重複している。特に本建物のP7がSB118のP3に切られている。一方、SB116とは調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建物 東西方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第228図)。桁行・梁行の規模が同規模で、平面形は整った長方形をなしている。ただし桁行・梁行ともに柱通りは良好ではない。建物の規模は、東梁行(P4-P6)で3.45m、南桁行(P6-P9)で5.20mを測り、両者を基準とした建物の面積は17.94m<sup>2</sup>である。南桁行(P6-P9)を基準とした棟軸方向はN69° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表23の通りである。

柱穴 すべての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も平面形が梢円形傾向にあり、その規模もほぼ同じである。またP4においては柱痕が検出されている。埋土はいずれも黒褐色細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表23の通りである。



第228図 SB117

**出土遺物** P 4 から土師器の杯と鍋が出土している。杯は口縁部の小片が出土している。鍋は、外側が縱方向のハケの後横ナデにより、内面が横ナデにより仕上げられている。

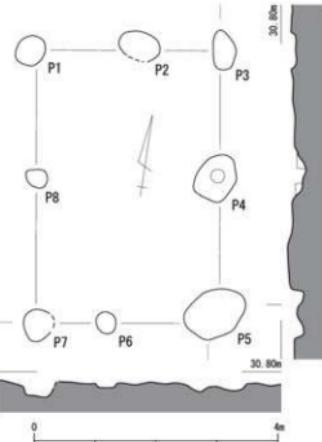
**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB118(附表23)

**検出状況** 建物群16南東部に位置する(第218図)。SB117と平面的に重複し、P 3 がSB117のP 7 を切っている。SB115の東側、SB116の南側に位置し、両建物と棟軸方向をほぼ同じくしている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 南北方向に棟軸をもつ、梁行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第229図)。桁行・梁行ともにほぼ同規模で、比較的整った平面形をなしている。柱通りも良好である。ただし両梁行の柱穴間距離は一定していない。建物の規模は、南梁行(P 5 - P 7 )で2.85m、西桁行(P 7 - P 1 )で4.45mを測り、両者を基準とした建物の面積は12.68m<sup>2</sup>である。西桁行(P 1 - P 7 )を基準とした棟軸方向はN 8° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表23の通りである。

**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。いずれも柱穴も平面形が梢円形傾向にあり、その規模も一定していない。P 4においては柱痕が検出されている。埋土はい



第229図 SB118

ずれも黒褐色極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表23の通りである。

**出土遺物** P 3 と P 5 から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P 3出土土器** 土師器の杯の口縁部片が出土している。薄手に仕上げられている。

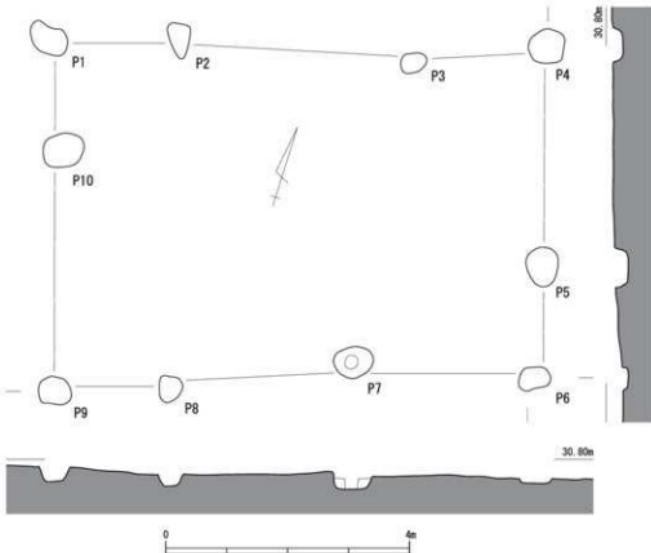
**P 5出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はヘラ削りにより仕上げられている。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB119(図版12 写真図版74 附表23・37)

**検出状況** 建物群16南東部に位置する(第218図)。SB117の南側に位置し、棟軸方向をほぼ同じくしている。SB118と平面的に重複するが、前後関係については調査では明らかにできなかった。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第230図)。桁行についてはほぼ同規模であるが、梁行についてはその規模に35cmの差が認められる。柱通りに関しては、両桁行に乱れが認められる。また梁行に関しては中間柱(P 5 - P 10 )の位置が梁行の中央部ではなく、両者が相对する位置にもない。このため柱穴間距離は大きく異なる。建物の規模は、南桁行(P 6 - P 9 )で7.90m、西梁行(P 9 - P 1 )で5.70mを測り、両者を基準とした建物の面積は45.03m<sup>2</sup>である。南桁行を基準とした棟軸方向はN73° 15' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表23の通りである。



第230図 SB111

**柱 穴** すべての柱穴が検出されているが、どの柱穴の平面形も整った形状をなしていない。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できたのはP7に限られる。各柱穴の規模は附表23の通りである。

**出土遺物** P1・P3・P6・P8を除く各柱穴から土器が出土している(図版12)。

**P2出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。須恵器は杯Bと杯が出土している。杯Bは高台のみの残存である。杯は口縁部が残存し、焼成が不十分な製品である。

**P4出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。須恵器は皿A(318)が出土している。318は皿Acに分類され、底部から口縁部にかけて残存する。口縁部は大きく外反傾向にある。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、他の内外面は回転ナデにより仕上げられている。

**P5出土土器** 土師器の壺の体部片が出土し、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

**P7出土土器** 土師器の杯・高杯・壺が出土している。杯は口縁部が残存し、厚手に仕上げられ、赤色化している。高杯は杯部が残存し、内外面ともヘラミガキにより仕上げられ、赤色化している。壺の可能性も考えられる。壺は体部片が出土し、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

**P9出土土器** 土師器の高杯の脚端部が出土している。

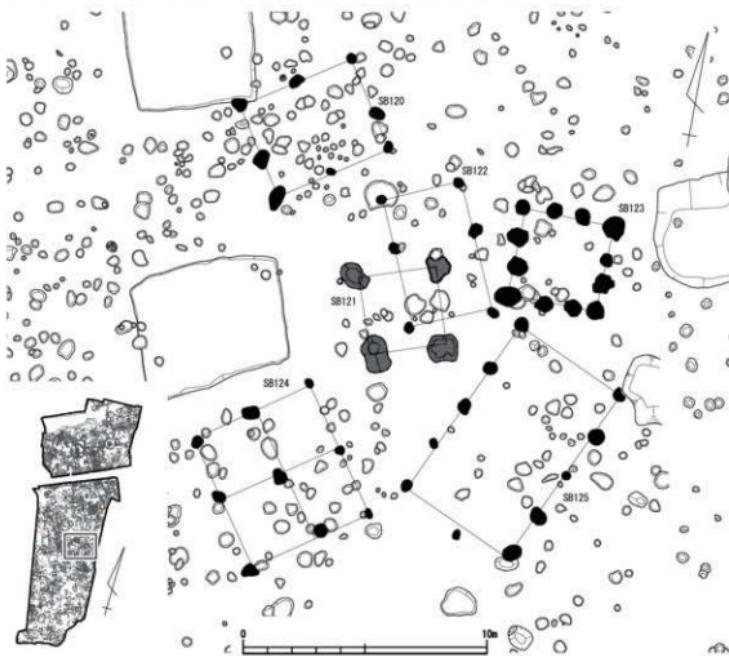
**P10出土土器** 土師器の高杯と壺が出土している。高杯は口縁部の小片で、壺の可能性も考えられる。内面はヘラミガキ、外面は横ナデにより仕上げられている。

**壺** は、壺Ecの口縁部片と体部片が出土している。壺の体部片は、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

**時 期** 出土土器および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## 18. 建物群17

南地区中央部、建物群16の東側に位置する(第79図)。6棟の建物(SB120～SB125)からなる建物群である(第231図)。顕著な建物相互の切り合い関係、および平面的重複は認められない。



第231図 建物群17

## SB120(附表23)

検出状況 建物群17内北西部に位置する(第231図)。SB122の北西側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

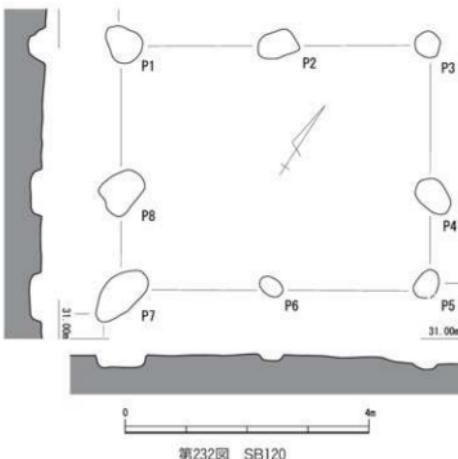
建 物 北東～南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第232図)。桁行については同規模で、梁行についてもほぼ同規模である。このため、建物の平面形は整った長方形をなしている。柱通りについても比較的良好である。ただし梁行の中間柱(P4・P8)は中間ではなく、南東側に偏った位置にある。建物の規模は、北西桁行(P1～P3)・南東桁行(P5～P7)とも5.00m、北東梁行(P3～P5)で3.90mを測り、両者を基準とした建物の面積は19.50m<sup>2</sup>である。南東桁行を基準とした棟軸方向はN57°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表23の通りである。

柱 穴 すべての柱穴が検出されているが、いずれの柱穴の平面形も整った形状をなしていない。全体的に梢円形傾向にある。このなかでP7の規模が突出している。深さについては、P1の28cmが最深である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認め

られない。各柱穴の規模は附表23の通りである。

出土遺物 遺物は1点も出土していない。

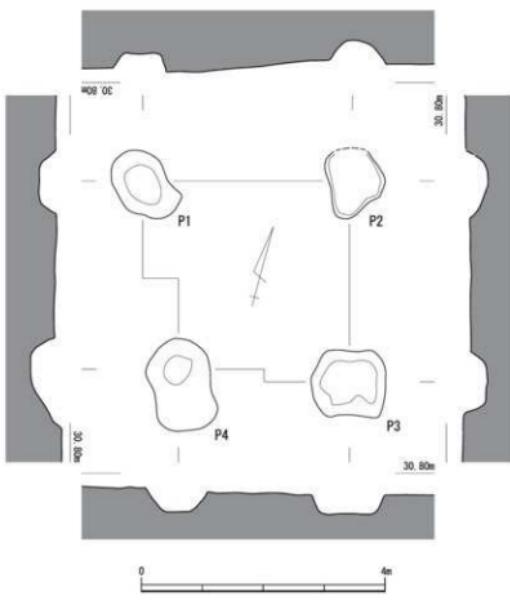
時 期 遺物が出土していないため、出土遺物から時期を判断することは困難である。棟軸方向からも同方向の建物が認められず、時期を特定することはできない。



第232図 SB120

SB121(図版12・75 写真図版74・186 附表23・37・38・100)

検出状況 建物群17内中央部に位置する(第231図)。SB120の南側、SB124の北東側、SB123の西側に位置する。SB122と平面的に重複するが、明確な切り合い関係は認められない。他の遺構との切り合い



第233図 SB121

関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建　　物** 南北方向に棟軸をもつ梁行1間、桁行1間の建物である(第233図)。当初は各柱穴を土壤として調査を進めていたが、同規模で方形に配置されることから柱穴と再認識し、一棟の建物として復元したものである。南辺と北辺は平行関係にあるが、西辺と東辺は平行関係ではない。建物の規模は、東桁行(P2-P3)で3.30m、北梁行(P1-P2)で3.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は11.55m<sup>2</sup>である。東梁行を基準とした棟軸方向はN15° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表23の通りである。

**柱　　穴** すべての柱穴が検出されているが、いずれの柱穴の平面形も長方形傾向にある。各柱穴とも大型で、各辺が1mを超える規模である。深さについては28cm~38cmとほぼ一定している。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂~細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表23の通りである。

**出土遺物** 全ての各柱穴から出土しているが、P1から出土した土器については小片のため図化できなかった。須恵器の出土は認められない。

#### P1出土土器

土器は土師器の高杯と壺が出土している。高杯は脚端部片と脚柱部片が、壺は体部の小片が出土している。壺の体部内外面はハケにより仕上げられている。

石器はS8の1点が出土している。扁平な自然石を利用したもので、石皿と考えられる。扁平な2面に小規模な窪みが多く認められる。

**P2出土土器** 土師器の鉢と高杯が出土している。鉢は319の1個体で、外面にハケが認められたことから、杯ではなく鉢と判断したものである。内外面とも横ナデにより仕上げられている。高杯については脚部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**P3出土土器** 弥生土器の壺(321)が出土している。321は、直立傾向にある体部に対して複合口縁状をなす口縁部がつくものである。体部外面は横方向のハケ、内面は同方向のヘラ削りにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。この他口縁部複合部外面には弱いキザミ目が認められる。

**P4出土土器** 須恵器の楕B(320)が出土している。楕Ba2に分類され、底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、回転ナデにより仕上げられている。体部から口縁部にかけての立ち上がりがほぼ直線的である。

**時　　期** P3出土土器については、柱穴掘削以前の土器が混入したものと考えられる。他の土器の年代観から、南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB122(附表23)

**検出状況** 建物群17中央部に位置する(第231図)。SB123の西側、SB120の南東側、SB125の北西側に位置する。他の造構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建　　物** 南北方向に棟軸をもつ梁行1間、桁行2間の隅柱建物である(第234図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、比較的整った長方形をなしている。柱通りについても比較的良好である。建物の規模は、東桁行(P2-P4)で5.50m、南梁行(P4-P5)で3.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は19.25m<sup>2</sup>である。西桁行を基準とした棟軸方向はN22° 45' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表

23の通りである。

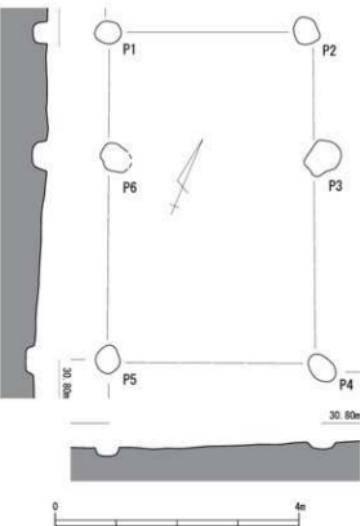
**柱穴** すべての柱穴が検出されているが、いずれの柱穴の平面形も整った形状をなしていない。全体的に円形傾向にある。深さについては12cm～25cmと、ほぼ同規模である。埋土はすべて黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表23の通りである。

**出土遺物** P1から土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

土師器は杯と壺が出土している。杯は口縁部片が残存し、厚手のつくりである。壺は体部片が出土しており、内外面ともハケにより仕上げられている。

須恵器は壺の体部片が出土している。

**時期** 出土土器および棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第234図 SB122

#### SB123(写真図版42 附表24)

**検出状況** 建物群17東部、SB125の北側、SB122の東側に隣接する(第231図)。他の遺構との明確な切り合ひ関係は認められず、建物全体が検出されている。P10が柱穴P103を切っている。

**建物** 南北方向に棟軸をもつ、梁行3間、桁行3間からなる側柱建物である(第235図)。桁行・梁行の規模が同規模で、平面形は方形をなしている。建物の規模は、西桁行(P1-P10)で3.75m、北梁行(P1-P4)で3.85mを測り、両者を基準とした建物の面積は14.43m<sup>2</sup>である。南梁行(P7-P10)を基準とした棟軸方向はN88°30'Wを示している。柱穴間の距離が1m強と、他の建物と比較して小規模な点が特徴である。各柱穴間の距離等は附表24の通りである。

**柱穴** すべての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も平面形が不定形である点が特徴である。また、P5を除いては70cm前後と、その規模がほぼ一定している。検出面からの深さについてもP4の35cmが最深で、全体的に浅い傾向にある。またP4とP11においては柱痕が検出されている。埋土はいずれも黒褐色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表24の通りである。

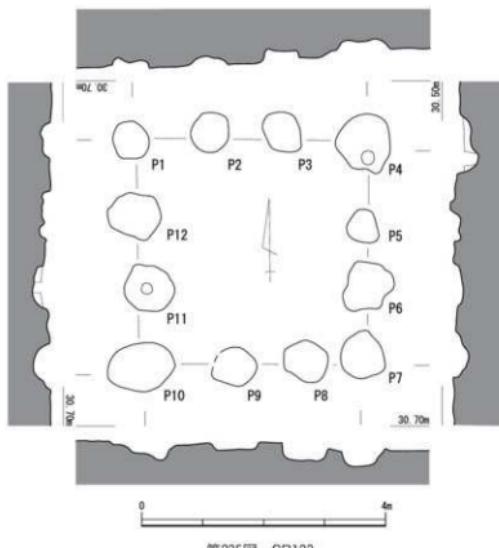
**出土遺物** P1・P4・P8・P10・P11から土器が出土している。全て小片のため図化できなかった。

**P1出土土器** 土師器の杯と壺が出土している。杯は体部の小片が、壺は頭部片が出土している。頭部片は内外面とも横ナデにより仕上げられている。

**P4出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はナデ、外表面はハケにより仕上げられている。

**P8出土土器** 土師器の杯・高杯・壺が出土している。杯は口縁部片が出土しており、赤色化している。高杯は壺の底部片と脚柱部片が出土している。壺は体部片が出土しており、内面はナデ、外表面はハケにより仕上げられ、外表面には煤の付着が認められる。

**P10出土土器** 土師器の高杯の脚端部が出土している。



第235図 SB123

P11出土土器 土師器の鉢もしくは高环の坏部片が出土し、内面がヘラミガキにより仕上げられている。

時 期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅵ期に位置付けられる(第7章第1節)。

備 考 本建物については総柱建物ではないが、建物の平面形・柱間距離等から判断して、倉として機能していたものと考えられる。

#### SB124(図版12 写真図版74 附表24・38)

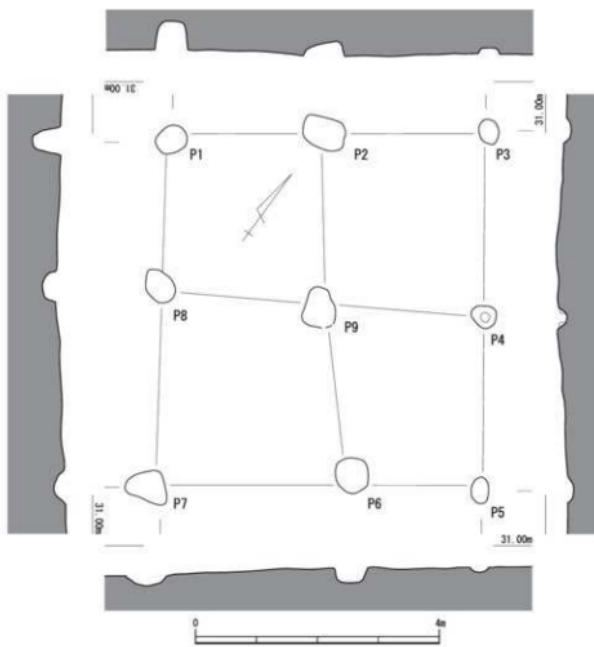
検出状況 建物群17内南西部に位置する(第231図)。SB121の南西、SB125の西側に隣接する。他の造構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 北西-南東方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行2間からなる総柱建物である(第236図)。桁行・梁行ともほぼ同規模からなり、平面形は方形をなす。ただし南東梁行において、P6はP5-P7の中間になく、柱穴間距離には顕著な差が認められる。建物の規模は、北西梁行(P1-P3)で5.20m、北東桁行(P3-P5)で5.85mを測り、両者を基準とした建物の面積は30.42m<sup>2</sup>である。北東桁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向はN35°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表24の通りである。

柱 穴 すべての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、P7とP9が不定形である以外は、梢円形もしくは隅丸方形傾向にある。またその規模にも差が目立つ。検出面からの深さについても、P1が48cmと明らかに深く、他は25cm以下と浅い傾向にある。この他P4においては柱痕が検出されている。埋土はいずれも黒褐色極細紗1層からなる。各柱穴の規模は附表24の通りである。

出土遺物 P1・P4・P5を除く各柱穴から土器が出土している(図版12)。

P2出土土器 土師器の杯と壺が出土している。杯は体部の小片で、内外面に赤彩が認められる。壺は肩部の小片で、内面が指オサエ、外面が横ナデにより仕上げられている。



第236図 SB124

**P 3 出土土器** 土師器と須恵器が出土している。

土師器は皿、高杯、甕の各器種が出土している。皿は口縁部片が出土しており、内外面に赤彩が認められる。高杯は杯底部の一部が出土している。甕は、甕Gcに分類される口縁部片と、体部片が出土している。体部片は、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。須恵器は甕の体部片が出土し、内面には當て具痕が残り、外面は叩き整形後カキ目が加えられている。

**P 6 出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は甕の体部片が出土している。内面はナデ、外面はハケにより仕上げられている。須恵器は鉢(322)が出土している。322は台付鉢の一部と考えられる。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面には自然釉の付着が認められる。

**P 7 出土土器** 土師器の杯の口縁部片が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、その後内面にはヘラミガキが加えられ、最後に放射状の暗文が施されている。

**P 8 出土土器** 土師器の杯・高杯、甕が出土している。杯は体部片が残存し、精良な胎土が特徴的である。高杯は脚柱部が残存し赤色化している。甕は肩部が残存し、内面はヘラ削り、外面は横ナデにより仕上げられている。丸刷タイプの甕である。

**P 9 出土土器** 土師器の高杯の脚端部が出土している。

時 一期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅲ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB125(図版12 附表24・38)

**検出状況** 建物群17南東部、SB124の東側、SB122・SB123の南東側に位置する(第231図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行4間の剛柱建物である(第237図)。ただし北梁行の中間柱を欠く。桁行はほぼ平行関係にあるが、南梁行の柱通りに乱れが認められ、平面的にはやや歪んだ形状をなしている。建物の規模は、東桁行(P6-P10)で7.90m、南梁行(P1-P10)で5.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は40.29m<sup>2</sup>である。東桁行を基準とした棟軸方向はN23°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表24の通りである。

**柱 穴** 北梁行の1穴を欠く。柱穴の平面形は円形もしくは梢円形傾向にあり、埋土は黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。P9で柱痕を検出している。各柱穴の規模は附表24の通りである。

**出土遺物** P1・P5・P6・P7から土器が出土している(図版12)。

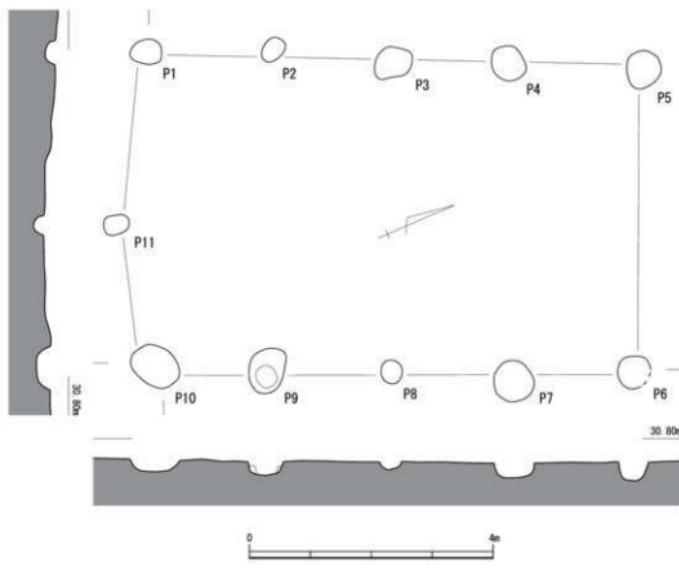
**P1出土土器** 土師器の楕もしくは高壺の体部片が出土している。外面はヘラナデにより仕上げられ、内面には暗文が認められる。

**P5出土土器** 土師器の甕Eaに分類される口縁部片が出土している。小型の甕と考えられる。

**P6出土土器** 土師器の杯・鉢(323)・甕が出土している。杯は口縁部の小片で、薄手のつくりである。323は口縁部がわずかに残存し、端部がわずかに外方につまみ出されている。内外面とも横ナデにより仕上げられている。甕は体部片が出土し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**P7出土土器** 土師器の甕の体部片が出土し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

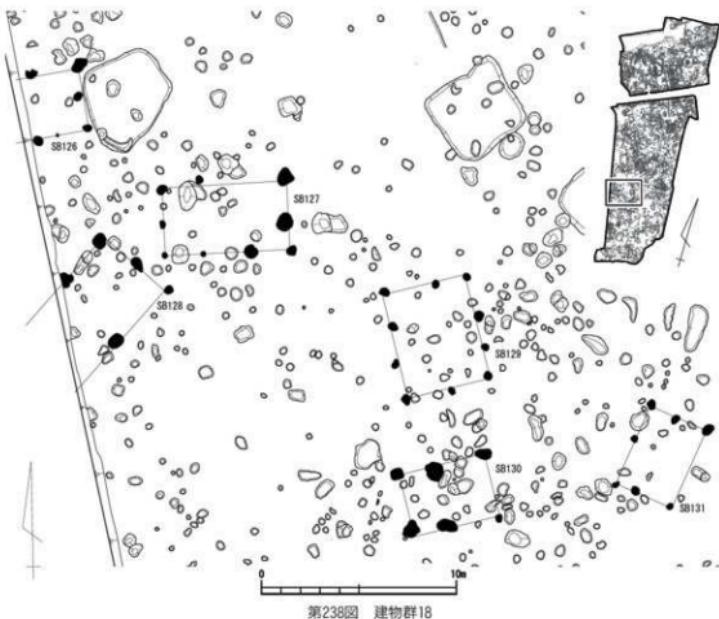
**時 期** 出土土器および棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる(第7章第1節)。



第237図 SB125

## 19. 建物群18

南地区南西部、建物群16の南側、建物群19の北側に位置する(第79図)。6棟(SB126～SB131)の建物からなる建物群である(第238図)。建物相互の切り合いおよび平面的重複関係は認められない。

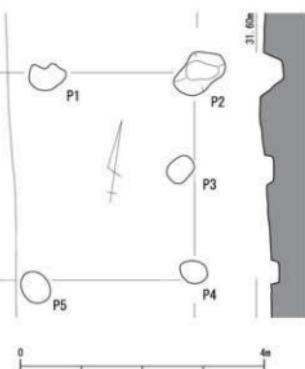


第238図 建物群18

## SB126(附表24)

検出状況 建物群18北西部に位置する(第238図)。一部の柱穴については土壤として調査を進めていったが、他の柱穴とともに規則的に並ぶことから柱穴と判断し、建物として復元したものである。建物の大半は調査区西側へ抜がっており、全体を検出することはできなかった。SB127の北西側、SB128の北側に位置する。また他の遺構との切り合い関係は認められない。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間の単柱建物である(第239図)。桁行については、建物が調査区外へ延びており、検出できたのは南北両側とも1間分のみである。少なくとも2間はあると判断されるが、全体の規模を復元することはできない。東西方向(P2-P4)で3.30mを測り、これを基準とした棟軸方向はN



第239図 SB126

7° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表24の通りである。

**柱 穴** P1とP2については、当初土壙として調査を進めていた遺構である。このため平面的に不整形で、他の柱穴と比較して大型である。また平面・断面において柱痕を確認することはできなかった。埋土はいずれも黒褐色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表24の通りである。

**出土遺物 遺物は全く出土していない。**

**時 期** 出土土器から時期を判断することはできない。建物の棟軸方向等から判断して、南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB127(附表24)

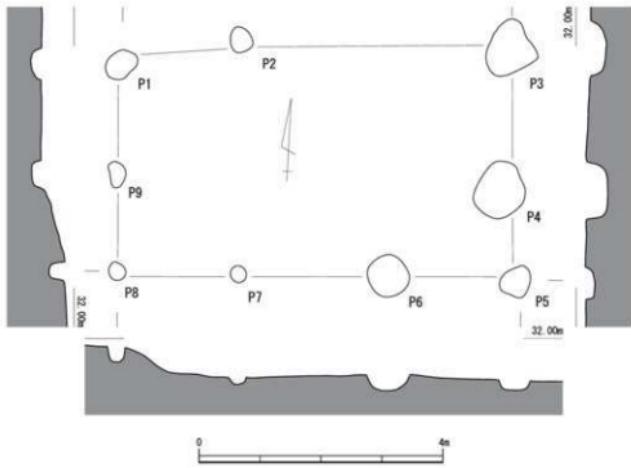
**検出状況** 建物群18の中央部、SB129の北西側、SB128の北東側に位置する(第238図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** ほぼ東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第240図)。北桁行の柱通りがやや乱れているが、ほぼ整った平面形をなしている。建物の規模は、南桁行(P5-P8)で6.50m、西梁行(P1-P8)で3.35mを測り、両者を基準とした建物の面積は21.77m<sup>2</sup>である。南桁行を基準とした棟軸方向はN87°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表24の通りである。

**柱 穴** 北桁行中間柱の1穴を欠く。平面形は円形もしくは楕円形傾向にあるが、P3～P5のように歪んだ形状のものも認められる。このなかで、P4は調査時においては土壙と判断していたものである。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表24の通りである。

**出土遺物** P1・P3・P4・P6から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P1出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。



第240図 SB127

P3出土土器 土師器の杯の体部片が出土している。薄手に仕上げられている。

P4出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は高环と甕が出土している。高环は脚部片が出土している。甕は体部片が出土しており、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。長胴タイプに分類される大型の甕である。須恵器は杯蓋が出土している。

P6出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯と甕が出土している。杯は体部の小片が出土しており、赤色化している。甕は体部片が出土しており、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

須恵器は杯が出土している。口縁部から体部にかけて残存する小片で、薄手の造りである。

時 期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB128(附表25)

検出状況 建物群18内中央部西側に位置する(第238図)。P3とP4を除く柱穴については土壤として調査を進めていったが、これらの土壤と柱穴が規則的に並ぶことから、建物として復元したものである。

建物の大半は調査区西側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。SB126の南側、SB127の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

建 物 北東-南西方向に棟軸をとる梁行2間の側柱建物である(第241図)。桁行については調査区外へ延びており、検出できたのは両側の1間分のみである。少なくとも2間はあると判断されるが、全体の規模を復元することはできない。北東梁行(P2-P4)で4.35mを測り、南東桁行(P4-P5)を基準とした棟軸方向はN42°00' Eを示している。

各柱穴間の距離等は附表25の通りである。

柱 穴 P1~P3・P5については、他の柱穴と比較して大型である。70cmを超える規模である。またこれらの柱穴については、平面的にも断面観察においても柱痕を確認することはできなかった。P4においても柱痕を確認することはできなかった。埋土は黒褐色極細砂1層からなる。

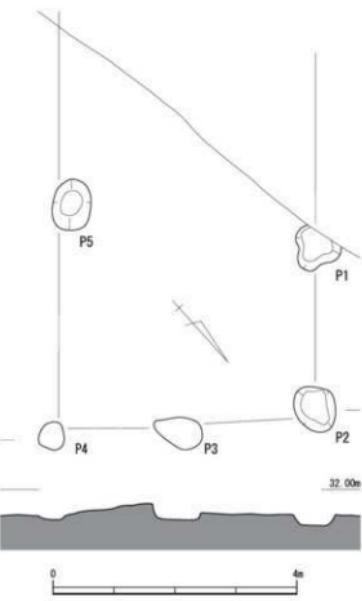
各柱穴の規模は附表25の通りである。

出土遺物 P4とP5から土器が出土している。

P4出土土器 土師器の甕の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯の底部片が出土している。須恵器は杯の口縁部片が出土している。薄手のつくりである。

時 期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第241図 SB128

## SB129(図版12 写真図版75 附表25・38)

**検出状況** 建物群18内中央部、SB130の北側、SB127の南東側に位置する(第238図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第242図)。東西の桁行の規模が異なり、平面形は台形傾向にある。建物の規模は、北梁行(P1-P3)で4.35m、西桁行(P1-P8)で5.60mを測り、両者を基準とした建物の面積は24.36m<sup>2</sup>である。西桁行を基準とした棟軸方向はN9°15'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表25の通りである。

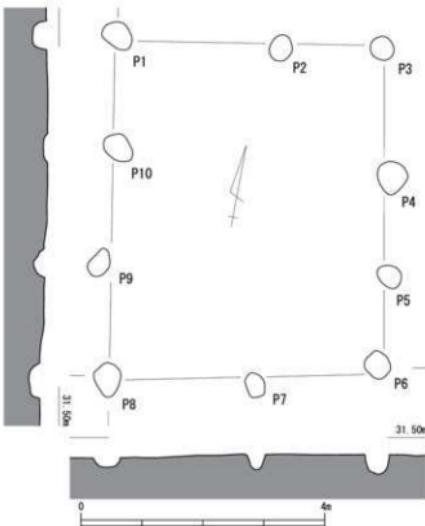
**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。全体的に小型で、平面形は円形もしくは梢円形傾向にある。

埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表25の通りである。

## 出土遺物 P1から弥生土器の高坏(324)

が出土している(図版12)。324は北近畿系の高坏で、坏部から脚部上半まで残存する。坏部は体部と口縁部の境が明確な段をなし、口縁部は受け口状をなしている。体部外面は横方向の、内面は縦方向の後、上部が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。口縁部内面も横方向のヘラミガキにより仕上げられ、外面は4条からなる擬凹線が施されている。脚柱部外面についても縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。特に坏部外面のヘラミガキは、細筋で丁寧に仕上げられている。

**時 期** 出土土器から、南構Ⅲ期に位置付けられる(第7章第1節)。



第242図 SB129

## SB130(附表25)

**検出状況** 建物群18中央部南側、SB129の南側、SB131の西側に位置する(第238図)。P4を除いては土壤として調査を進めていったが、土壤と柱穴が規則的に並ぶことから建物として復元したものである。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** ほぼ東西方向に棟軸をもつ梁行1間、桁行2間の側柱建物である(第243図)。北桁行の柱通りはやや乱れているが、全体的に整った平面形をなしている。また南北両桁行の中間柱は西側に寄った位置にある。建物の規模は、南桁行(P4-P6)で4.60m、西梁行(P1-P6)で3.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は13.80m<sup>2</sup>である。南桁行を基準とした棟軸方向はN80°00'Eを示している。各柱穴間の距離等は附表25の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。平面形は不整形なものが目立つ。埋土はすべて黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表25の通りである。

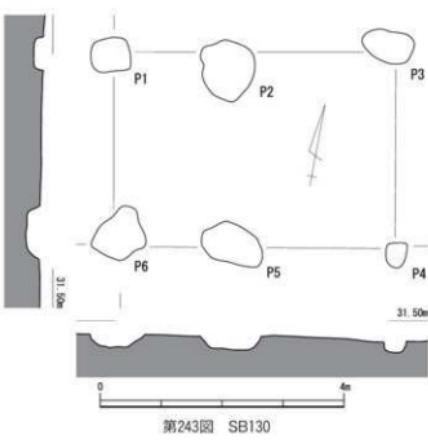
出土遺物 P2・P4・P6から土器が出  
土している。いずれも小片のため固化で  
きなかった。

P2出土土器 須恵器の壺の一部と考  
えられる小片が出土している。

P4出土土器 土師器の壺の体部片が  
出土し、内面はヘラ削り、外面はハケに  
より仕上げられている。

P6出土土器 土師器の杯の体部片が  
出土している。

時 期 出土土器および棟軸方向から  
判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けら  
れる(第7章第1節)。



第243図 SB130

#### SB131(附表25)

検出状況 建物群18南東部、SB130の東側、SB129の南東側に位置する(第238図)。他の遺構との明確な  
切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、  
桁行2間の据立柱建物である(第244図)。東西の桁  
行が平行せず、平面形は台形傾向にある。また南  
梁行の中間柱は、西側に寄った位置にある。建物  
の規模は、南梁行(P4-P6)で3.00m、西桁行  
(P1-P6)で4.50mを測り、両者を基準とした建  
物の面積は13.50m<sup>2</sup>である。西桁行を基準とした  
棟軸方向はN25°00' Eを示している。各柱穴間  
の距離等は附表25の通りである。

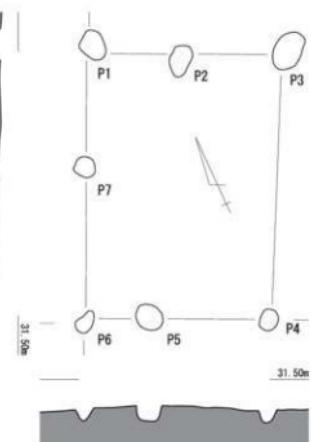
柱 穴 東梁行の中間柱を欠く。全体的に小  
型で、平面形は円形もしくは橢円形傾向にある。  
埋土は黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からな  
る。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。  
各柱穴の規模は附表25の通りである。

出土遺物 P1とP5から土器が出土している。

P1出土土器 土師器の壺の体部片が出土し、  
内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられて  
いる。

P5出土土器 土師器の壺の体部片と頭部片が出土している。体部片は、内面がヘラ削り、外面がハ  
ケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。頭部片には被熱痕が認められる。

時 期 棟軸方向および出土土器からも時期の特定は困難である。



第244図 SB131

## 20. 建物群19

南地区南西部にあたり、建物群18の南側、建物群20の北側に位置する(第79図)。7棟(SB132～SB138)からなる建物群である(第246図)。SB135～SB137の3棟が平面的に重複し、切り合い関係にある以外は、独立している。



第245図 建物群19の調査



第246図 建物群19

## SB132(附表25)

**検出状況** 建物群19北西部、SB133の北西側に位置する(第246図)。各柱穴については土壤として調査を進めていったが、それぞれの土壤が規則的に並ぶことから建物として復元したものである。建物の大半は調査区西側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。また他の遺構との切り合い関係も認められない。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間の側柱建物である(第247図)。桁行については調査区外へ延びており、検出できたのは南北両側とも1間分のみである。少なくとも2間はあるものと判断されるが、全体の規模を復元することはできない。東梁行(P2-P4)で3.40mを測り、これを基準とした棟軸方向はN $6^{\circ} 30' W$ を示している。各柱穴間の距離等は附表25の通りである。

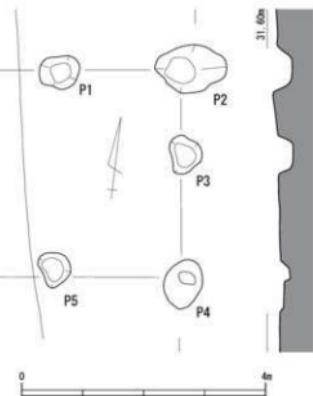
**柱 穴** 柱穴の平面形については、当初土壤と考えたように、不整形・梢円形傾向のものが目立つ。また、全体的に他の柱穴と比較して大型である。土壤として調査を進めていたため、平面的に柱痕を確認することはできなかった。また各柱穴断面の観察においても確認することはできなかった。埋土はいずれも黒褐色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表25の通りである。

**出土遺物** P2とP3から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P2出土土器 土師器の杯の底部片が出土している。

P3出土土器 土師器の高杯の脚部が出土している。杯底部には暗文が認められ、赤色化している。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる(第7章第1節)。



第247図 SB132

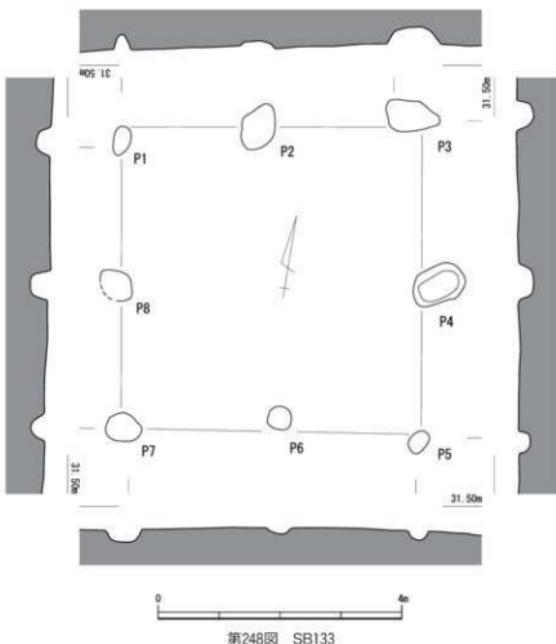
## SB133(附表25)

**検出状況** 建物群19内北東部、SB132の南東側、SB134の北側に位置する(第246図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

**建 物** 南北方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第248図)。桁行・梁行ともにはば同規模で、ほぼ方形に近い平面形をなしている。柱通りも良好である。各辺の柱穴間距離についてもほぼ等間隔である。建物の規模は、南梁行(P5-P7)で4.90m、西桁行(P7-P1)で4.70mを測り、両者を基準とした建物の面積は23.03m<sup>2</sup>である。西桁行(P1-P7)を基準とした棟軸方向はN $9^{\circ} 30' W$ を示している。各柱穴間の距離等は附表25の通りである。

**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。P4については当初土壤として調査したものである。P2～P4がやや大型で隅丸方形傾向にある。他の柱穴については円形もしくは梢円形傾向にある。すべての柱穴において柱痕は確認されていない。埋土はいずれも黒褐色極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表25の通りである。

**出土遺物** P3・P4・P8から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。



第248図 SB133

**P3出土土器** 土師器の甕Gdに分類される口縁部片が出土している。大型に分類される甕である。

**P4出土土器** 土師器の甕の体部片が出土し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**P8出土土器** 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯と甕が出土している。杯は口縁部片が出土しており、厚手に仕上げられている。甕は体部片が出土しており、内面がヘラ削りによるものと、ナデによるものが認められる。外面はいずれもハケにより仕上げられている。

須恵器は杯の口縁部片が出土している。薄手に仕上げられている。

時 期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構V-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB134(附表26)

検出状況 建物群19中央部、SB137の北側、SB133の南側に位置する(第246図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 ほぼ南北方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第249図)。全体的に柱通りが良好で、整った平面形をなしている。建物の規模は、南梁行(P5-P7)で3.90m、西桁行(P1-P7)で4.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は18.72m<sup>2</sup>である。西桁行(P1-P7)を基準とした棟軸方向はN10°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表26の通りである。

柱 穴 北東隅の1穴を欠く。当該箇所の検出面のレベルが低かったため、検出できなかったものと考

えられる。平面形は円形傾向にあり、規模もほぼ同じである。深さもほぼ一定している。

埋土はいずれも黒褐色極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表26の通りである。

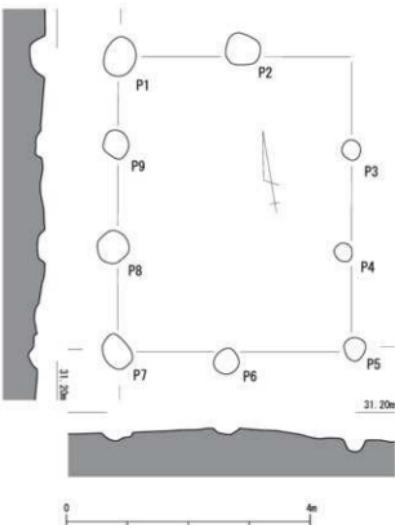
出土遺物 P1・P4・P8 から土器が出土している。全て小片のため固化できなかった。

**P1 出土土器** 土師器の壺が出土している。体部の小片で、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

**P4 出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はナデ、外面はハケにより仕上げられている。

**P8 出土土器** 土師器の壺の肩部が出土している。

時 期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅷ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第249図 SB134

#### SB135(図版12 写真図版75 附表26・38)

検出状況 建物群内19南西部、SB134の南西側に位置する(第246図)。調査時点において多くの柱穴に関して土壤と判断し、調査を進めていった。その後、これらの土壤が規則的な位置関係にあることから柱穴と判断し、建物として復元したものである。SB136・SB137と平面的に一部重複しており、P6がSB137のP1を、P7がSB136のP4を切っている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

建 物 北西-南東方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第250図)。桁行・梁行とも柱通りは比較的良好ではある。一方桁行と梁行は直交せず、建物の平面形は平行四辺形傾向にある。また、両桁行の中間柱の位置はそれぞれの中間よりずれた位置にある。建物の規模は、南西桁行(P1-P7)で5.10m、南東桁行(P5-P7)で4.10mを測り、両者を基準とした建物の面積は20.91m<sup>2</sup>である。南西桁行(P1-P7)の直交方向を基準とした棟軸方向はN29°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表26の通りである。

柱 穴 すべての柱穴が検出されている。P2とP4を除いては70cmを超える規模で、特にP6-P8は1mを超える規模である。平面形については不整形なものも認められるが、P1-P4については円形もしくは隅丸方形傾向にある。柱痕に関しては、当初土壤として検出したことから確認することはできなかった。各柱穴の規模は附表26の通りである。

出土遺物 P3・P4・P6・P8 から土器が出土している(図版12)。

**P3 出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は高壺の脚端部が、須恵器は杯の口縁部片が出土している。

P4 出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

P6 出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は高壺と甕が出土している。高壺は壺底部が残存している。甕は体部片が残存し、内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられている。

須恵器は甕(325)が出土している。325は口縁部のみ残存し、端部は水平な端面をなしている。外面とも回転ナデにより仕上げられている。

P8 出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は甕の口縁部片(327)と体部片が出土している。327は甕Cgに分類され、口縁部を中心には残存する。口縁部中央部外面には明確な段が認められる。体部外面を縱方向のハケ、内面を横方向(左→右)のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

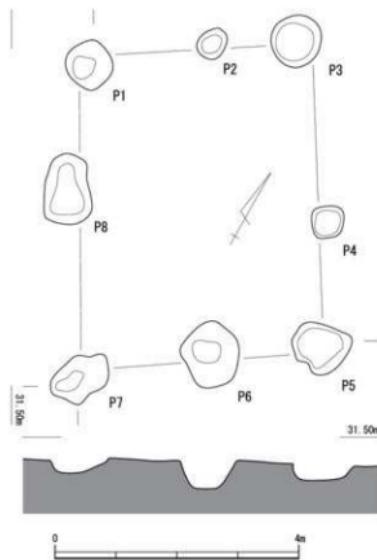
須恵器は杯A(326)が出土している。326は杯Acに分類される。底部はヘラ切りにより切り離されている。口縁部の立ち上がりはやや内湾気味である。体部から口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。最後に底部内面に仕上げナデが加えられている。口縁部は厚手に仕上げられ、全体的に稚拙なつくりである。また、口縁部内面には煤の付着が認められる。

時 一期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB136(図版12 附表26・38)

検出状況 建物群19南西部、SB137の西側に位置する(第246図)。全ての柱穴について土壤として調査を進めていったが、これらの土壤が規則的に並ぶことから建物として復元したものである。建物の大半は調査区西側へ拡がっており、全体を検出することはできなかった。SB135と平面的に重複し、P4がSB135のP7に切られている。

建 物 建物全体が検出されていないため、梁行・桁行を明確にすることは困難である。ただし柱間の規模から判断して、東辺(P2-P4)が桁行の可能性が高い。したがって、南北方向に棟軸をもつ桁行2間の隅柱建物と考えられる(第251図)。その規模は5.40mを測る。梁行については調査区外へ延びており、検出できたのは北側の1間分のみである。少なくとも2間はあるものと判断されるが、全体の規模を復元することはできない。ただし、柱穴の規模と比例し大型の建物であったものと考えられる。東桁行(P2-P4)を基準とした棟軸方向はN 9° 30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表26の通りである。



第250図 SB135

**柱 穴** 全ての柱穴について、当初土壤として調査を進めていった。このため、他の柱穴と比較して大型である。P1を除いて1mを超える規模である。以上から、平面的に柱痕を確認することはできなかった。さらに断面の観察においても確認することはできなかった。またP2とP4の平面形は方形傾向を示している。埋土はいずれも黒褐色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表26の通りである。

**出土遺物** 各柱穴から土器が出土している(図版12)。

**P1出土土器** 土器の杯と高壺(328)が出土している。杯は体部の小片が出土している。328は脚柱部を中心に残存する。脚柱部は、外側が縱方向のハケの後縦方向のヘラナデ、内面はナデにより仕上げられている。また内面上部には絞り目が顕著に認められる。壺底部には暗文が認められる。比較的細筋の暗文である。

**P2出土土器** 土器の杯Aと壺が出土している。杯Aは底部片が出土しており、ヘラ切りにより切り離されている。壺は体部の小片で、内面は指オサエ、外側は横ナデにより仕上げられている。

**P3出土土器** 土器の椀もしくは高壺と壺が出土している。前者は体部の小片で、椀もしくは高壺の可能性が考えられるものである。壺は体部の小片で、内面はヘラ削り、外側はハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。

**P4出土土器** 土器と須恵器が出土している。土器は杯Aの底部片が出土している。内外面に赤彩が認められる。須恵器は杯の体部片で、焼成が不十分である。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅷ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

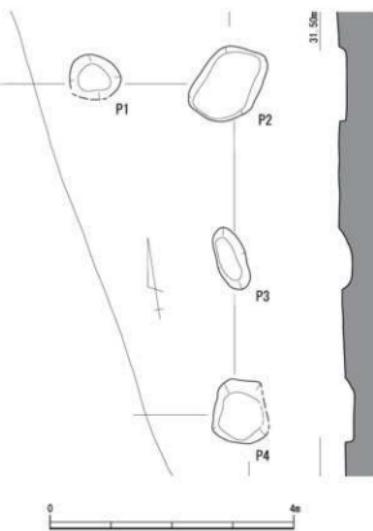
#### SB137(図版12 写真図版75 附表26・38)

**検出状況** 建物群19南西部に位置する(第246図)。SB134の南側、SB138の西側に位置し、SB136とは棟軸方向をほぼ同じくしている。SB135とは平面的に重複し、P1が当該建物のP6に切られている。他の造構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。

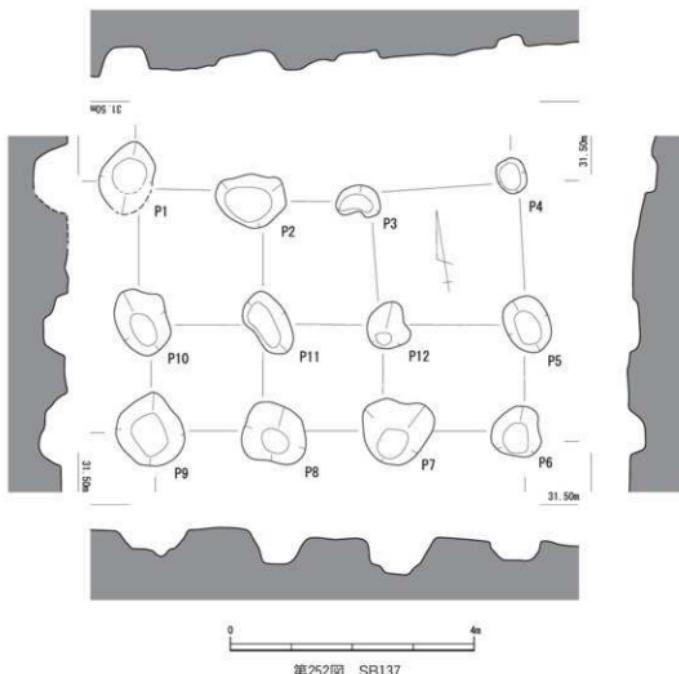
調査において、多くの柱穴を土壤と考え検出していった。その後、これらの土壤が規則的な位置関係にあることから柱穴と判断し、建物を復元したものである。

**建 物** 東西方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行3間からなる総柱建物である(第252図)。北桁行において柱通りがやや乱れているが、他の柱通りは良好である。北桁行の両端を結ぶラインは南桁行と平行するため、建物の平面は整った長方形をなしている。柱穴間距離についても、P3-P4間、P4-P5間以外はほぼ一定している。

建物の規模は、南桁行(P6-P9)で5.95m、西梁行(P9-P1)で4.20mを測り、両者を基準とした



第251図 SB136



第252図 SB137

建物の面積は24.99m<sup>2</sup>である。南桁行(P6～P9)を基準とした棟軸方向はN81°30'Wを示している。

各柱穴間の距離等は附表26の通りである。

**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。いずれの柱穴も大型で、半数以上の柱穴は1mを超える規模である。P4の規模がやや小型であることについても、検出面のレベルが他より低いことに起因するものと考えられる。平面形について規則性は認められないが、P5・P8～P10のように隅丸方形傾向のものが認められる。また柱痕に関しては、当初土壙として検出したことから確認することはできなかった。各柱穴の規模は附表26の通りである。

**出土遺物** P2・P5・P6・P8～P10から出土している。

**P2出土土器** 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯・鉢・高杯・甕の各器種が出土している。杯は口縁部が残存し、内外面に赤彩が認められる。鉢は口縁部の小片である。高杯は脚柱部が残存する。甕は体部の小片で、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

須恵器は杯Aと杯Bが出土している。杯Aは底部がヘラ切りにより切り離され、焼成が不十分である。杯Bは底部を中心に残存している。

**P5出土土器** 土師器の甕の体部片が出土し、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**P6出土土器** 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯A(329)と甕が出土している。329は杯Ad2に分類され、体部から口縁部にかけて直線的である。底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。内外面とも摩滅傾向にあるが、おそらく回転ナデにより仕上げられたものと考えられる。甕は体部片が出土しており、内外面ともハケにより仕上げられている。

須恵器は皿B(330)と鉢(331)が出土している。

330は口径24.25cmと大型の皿である。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられ、底部外面は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。底部外面には高台底部を含め墨の付着が認められ、器表面が平滑なことから、転用硯として使用されていたものと考えられる。内面にも部分的ではあるが墨の付着が認められる。

331は体部から口縁部にかけて残存する。鉢Dに分類されるものである。内外面とも回転ナデを基調とし、体部中位内面はナデにより仕上げられている。

#### P 8 出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯皿類と甕が出土している。杯皿類は底部片のため、両者の可能性が考えられるものである。内外面とも赤彩が認められる。甕は、甕Ecと甕Gdに分類される口縁部片が出土している。

須恵器は杯・壺・甕の各器種が出土している。杯は口縁部の小片で、薄手のつくりである。壺は底部片が出土しており、焼成が不十分である。甕は体部片が出土しており、外面は叩き整形により仕上げられ、内面には当て具痕が残存している。

#### P 9 出土土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器は杯と甕が出土している。杯は体部の小片が出土している。甕は体部の小片で、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。

須恵器は杯と杯Bが出土している。杯は体部から口縁部にかけて残存する小片である。杯Bは底部片が出土している。

#### P 10 出土土器 土師器の高杯の脚端部が出土している。

時 期 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB138(附表26)

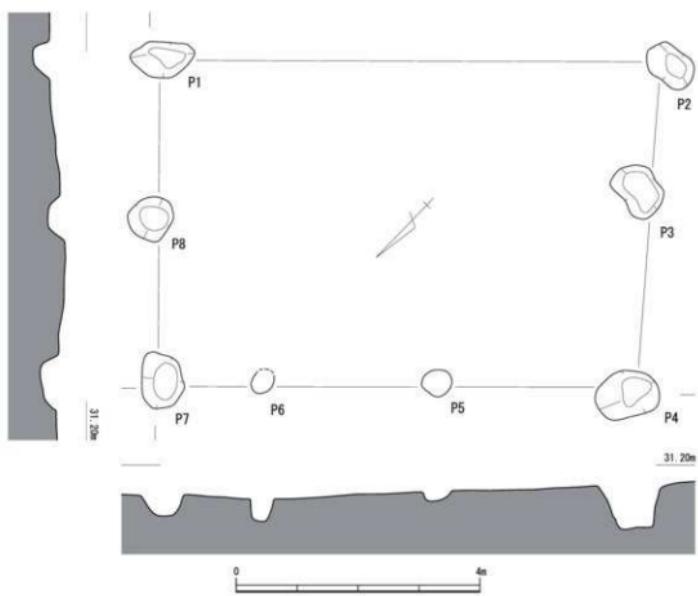
検出状況 建物群19南東部、SB137の東側に位置する(第246図)。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている(第253図)。

建 物 北東-南西方向に主軸をもつ、梁行2間、桁行3間からなる隅柱建物である(第254図)。南隅の柱穴の位置から、南北梁行の柱通りがやや不揃いであるとともに、北東梁行とは平行していない。このため、建物全体の平面形がやや歪んでいる。また柱穴間の距離に關しても、両梁行間で異なる。

建物の規模は、北東梁行(P1-P7)で5.25m、北西桁行(P4-P7)で7.65mを測り、両者を基準とした建物の面積は40.16m<sup>2</sup>である。北西桁行(P4-P7)を基準とした棟軸方向はN41°30' Eを示している。各柱穴間の距離は附表26の通りである。



第253図 SB138の調査



第254図 SB138

**柱 穴** 南東桁行の中間柱2穴を欠く。P5とP6を除いては、調査時においては土壤と考えていたもので、整理過程において建物の一部を構成する柱穴と判断したものである。P2～P4とP7・P8については平面形が隅丸方形傾向にある。P5を除いては全体的に深い傾向が認められる。いずれの柱穴においても柱痕は認められなかった。埋土はすべて黒褐色極細砂～細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表26通りである。

**出土遺物** P2とP4から土器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

P2出土土器 土師器の杯の口縁部片が出土している。厚手のつくりである。

P4出土土器 土師器と須恵器が出土している。

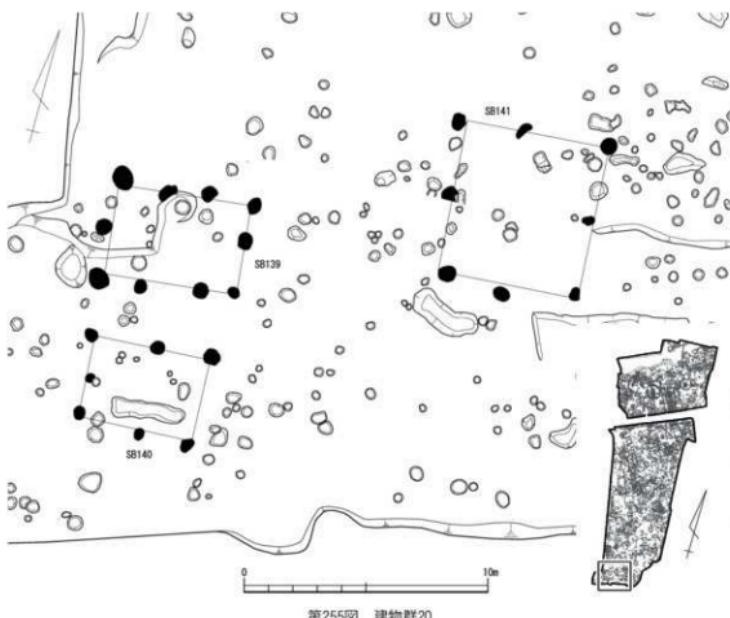
土師器 壺の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

須恵器 壺の体部片が出土している。外面は叩き整形により、内面には當て具痕が認められる。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## 21. 建物群20

南地区の南西隅、建物群19の南側に位置する(第79図)。3棟からなる建物群(SB139～SB141)で、それぞれ平面的重複、切り合い関係は認められず、独立している(第255図)。



第255図 建物群20

## SB139(附表27)

**検出状況** 建物群20北西部に位置する(第255図)。SB140の北側に位置し、棟軸方向をほぼ同じくしている。建物全体が検出されているが、検出面は南側へ傾斜する傾向にある。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間からなる側柱建物である(第256図)。桁行の規模はほぼ同規模であるが、梁行の規模が東西で異なり、平面形は台形傾向にある。建物の規模は、西梁行(P1-P9)で4.30m、北桁行(P1-P4)で5.50mを測り、両者を基準とした建物の面積は23.65m<sup>2</sup>である。北桁行(P1-P4)を基準とした棟軸方向はN87°15' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表27の通りである。

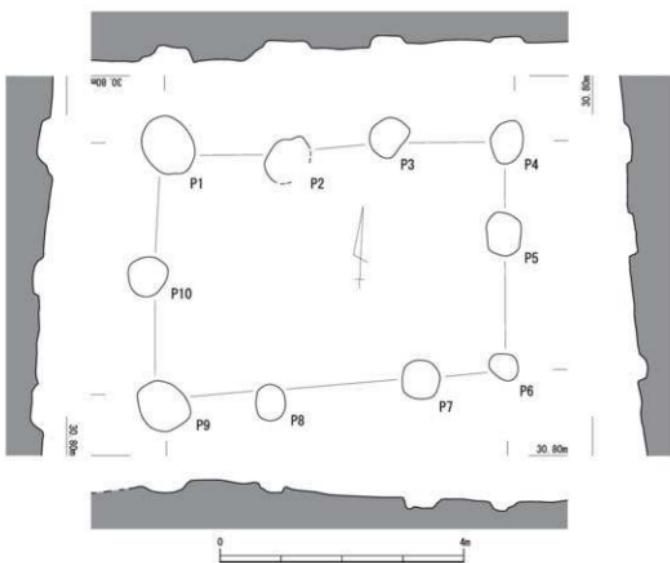
**柱 穴** すべての柱穴が検出されている。検出面からの深さは10cm大が多く、最深(P1)で28cmと、全体的に浅い傾向にある。柱穴の平面形は不整形なものが目立つが、P5・P7・P8等に方形傾向が認められる。その規模は50cm~80cm大が多く、P1のみ1m超と突出している。どの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土はいずれも黒褐色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表27の通りである。

**出土遺物** P1とP5から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P1出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。内外面ともハケにより仕上げられている。

P5出土土器 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。須恵器は杯蓋の口縁部片が出土している。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる(第7章第1節)。



第256図 SB139

## SB140(附表27)

**検出状況** 建物群20南西部に位置する(第255図)。SB139の南側に位置し、棟軸方向をほぼ同じくしている。他の造構との切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている。検出面は南側へ顕著に傾斜し、西梁行においては約1mの比高差が認められる。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ、梁行2間、桁行2間からなる側柱建物であるが(第257図)、東梁行の中間柱を欠く。桁行の規模はほぼ同規模であるのに対し、梁行の規模が東西で異なるため、平面形は台形傾向にある。建物の規模は、西梁行(P1-P6)で3.20m、北桁行(P1-P3)で5.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は16.00m<sup>2</sup>である。北桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向はN85°00' Eを示している。なお各柱穴間の距離等は附表27の通りである。

**柱 穴** 東梁行の1穴を除いてすべての柱穴が検出されている。ただしP7は一部を欠く。検出面からの深さは10cm大が多く、最深(P1・P3)で20cmと全体的に浅い傾向にある。柱穴の平面形は、P2・P3・P5・P6に方形傾向が認められる。他の柱穴は不整形である。その規模は40cm~60cm大の規模が多く、P7を除いてほぼ同規模である。どの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土はいずれも黒褐色極細砂1層からなる。なお、各柱穴の規模は附表27の通りである。

**出土遺物** P6から土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土しており、内外面ともナデにより仕上げられている。須恵器は壺の口縁部片が出土している。

**時 期** 出土遺物および棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる(第7章第1節)。